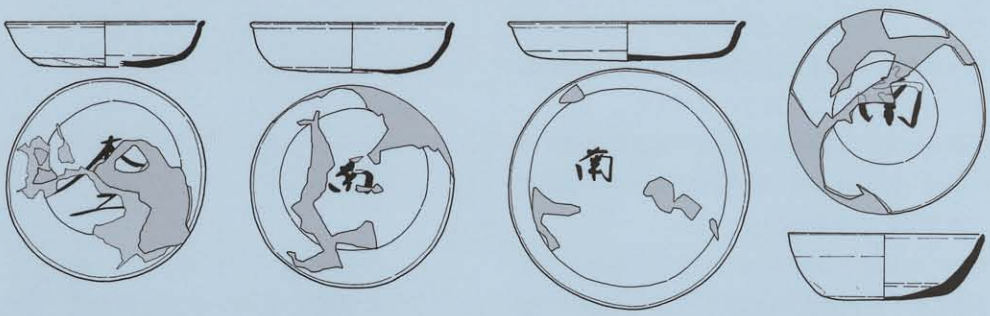
神戸市東灘区本山南町

本山中野遺跡第三次発掘調査報告



2009

神戸市教育委員会

序

近年、東灘区周辺では、芦屋廃寺・深江北町遺跡＝津知遺跡（芦屋駅）・郡家遺跡（菟原郡衙）など律令期の遺跡が発掘調査によって多く確認されています。

今回第３次調査を行った本山中野遺跡もそのひとつに加えることができることになりました。この遺跡の歴史的位置づけはこれからの課題となりますが、本書がその検討のための材料になることを願います。

調査ならびに本報告の刊行に際し御協力・ご教示いただきました皆様に深く感謝を申し上げます。

平成21年２月
神戸市教育委員会

例　言

1．本書は兵庫県神戸市東灘区本山南町７丁目３－１で行われた本山中野遺跡第３次調査発掘調査の報告である。
2．この調査はワコーレ神戸本山PLACEの建設に先立ち、平成19年12月17日～平成20年２月４日に実施した。遺物整理は平成20年２月４日～平成21年１月23日に実施した。
3．現地での発掘調査は神戸市教育委員会学芸員富山直人・中村大介・須藤宏が行った。保存科学的調査は中村が、遺物整理は黒田恭正、本書編集は須藤が担当した。
4．遺物写真については独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所（以下奈文研）牛嶋茂氏の指導の下、杉本和樹氏（西大寺フォト）および中村が行った。木質遺物およびガラス玉の図化および記述は中村が、遺構写真の撮影、遺構・その他遺物の図化・記述は須藤が行った。
5．SE01出土のガラス玉については奈文研保存修復科学研究室にご協力をいただき、墨書土器は奈文研渡辺晃宏氏に釈読していただいた。
6．出土木製品・種子等の樹種同定についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に分析業務を委託した。成果は第Ⅲ章に掲載。
7．本書での標高は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とするものを、方位・座標は世界測地系を使用している。
8．本書で使用した地図は、測量局発行の京阪地方仮製1/20000地形図「神戸」・「六甲山」・「芦屋」、国土地理院発行の1/50000地形図「神戸」・「大阪西北部」、神戸市発行1/2500地形図「本山」・「青木」である。
9．現地調査・報告書作成にあたっては上記の他、下記の方々にご教示・ご協力いただいた。記して感謝申し上げる。
浅岡俊夫　今里幾次　鐘方正樹　十河良和　中西輝夫
平野卓治　森岡秀人（敬称略・50音順）
芦屋市教育委員会　北畑評議会
10．発掘調査で出土した遺物ならびに図面・写真類は神戸市教育委員会が神戸市埋蔵文化財センターで管理・保管している。

調査体制（平成19・20年度）

神戸市文化財保護審議会委員（史跡・考古担当）
檀上重光　前神戸女子短期大学教授（19年度）
工樂善通　大阪府立狭山池博物館館長
和田晴吾　立命館大学文学部教授

神戸市教育委員会

教育長	小川雄三（19年度）
	橋口秀志（20年度）
社会教育部長	黒住章久
教育委員会参事	柏木一孝
社会教育部主幹	丸山　潔
〃	渡辺伸行
埋蔵文化財調査係長	千種　浩
文化財課主査	安田　滋
〃	山本雅和（19年度）
事務担当学芸員	阿部敬生
〃	中谷　正
整理担当学芸員	黒田恭正（20年度）
	佐伯二郎（20年度）
保存科学担当学芸員	中村大介

目　次

序・例言……2
目次……3
本文
Ⅰ．遺跡の位置……4
Ⅱ．第３次調査の概要……8
　層序……8
　第１遺構面……8
　第２遺構面……23
　第３遺構面およびその下層……25
　木質遺物……27
Ⅲ．自然科学分析……29
Ⅳ．まとめ……34

写真図版
　図版１　第１遺構面[1]遺構 ……33
　図版２　第１遺構面[1]遺構 ……34
　図版３　第１遺構面[3]柱穴土層断面 ……35
　図版４　第１遺構面SE01 ……36
　図版５　第１遺構面SE01出土遺物 ……37
　図版６　第１遺構面出土遺物[1] ……38
　図版７　第１遺構面出土遺物[2] ……39
　図版８　緑釉陶器・灰釉陶器・磁器……40
　図版９　瓦……41
　図版10　第２遺構面・第３遺構面……42

報告書抄録・奥付……43

表紙カット：SE01出土墨書土器(S：1/5)

裏表紙カット：3c層出土軒丸瓦(S：1/4)

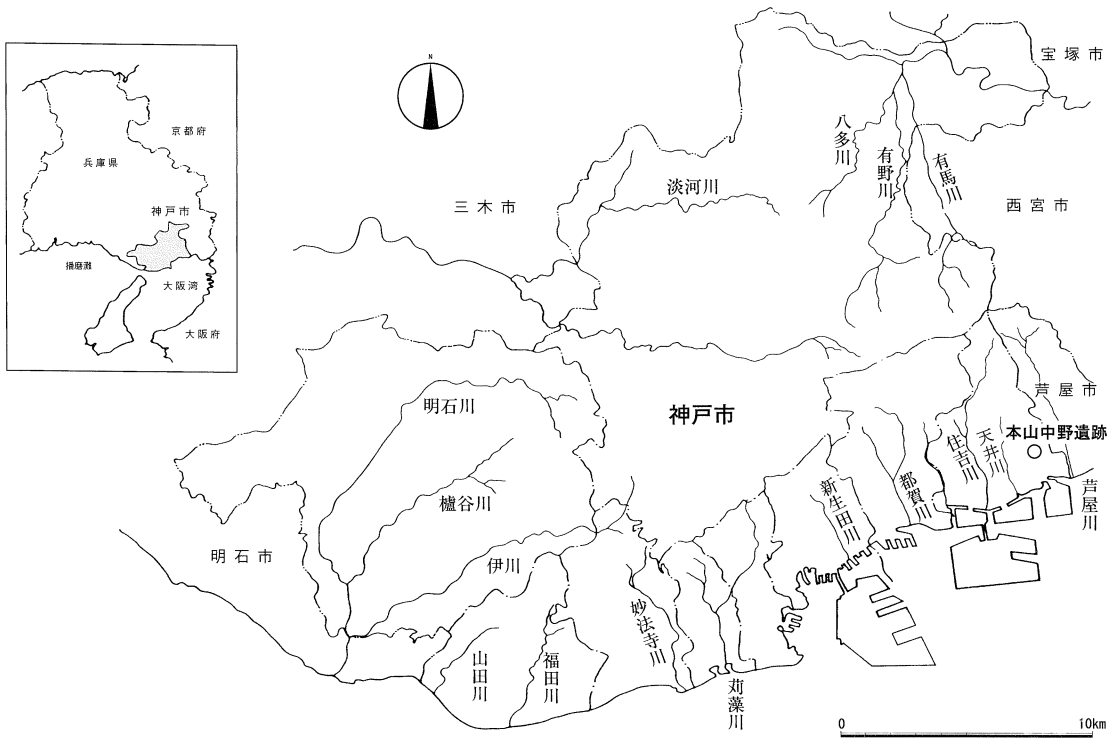


図２　本山中野遺跡の位置

Ⅰ．遺跡の位置

本山中野遺跡は六甲山系の南、高橋川左岸の瀬戸内海に面する平野部に位置する。所在地は神戸市東灘区本山南町７丁目、古い地名では摂津国菟原郡佐才郷あるいは芦屋郷にあたる。古代山陽道の位置は当地の北約20mを通るとする説や南約200mを通るとする説などがあるが、現在のところ確定していない。「駅」・「垣」・「家」・「蜂」・「神□（万カ）」・「大□」・「大垣」・「駅新」・「東」・「大西」・「卅一」などの墨書土器や「承和（834年～848年）」銘をもつ木簡などが出土し、山陽道芦屋駅と推定される深江北町＝津知遺跡が東1.0㎞に、芦屋廃寺が北東1.4㎞に位置する。その南に接して和同開珎や「大領」「少領」などの文字がある奈良時代の墨書土器が出土した寺田遺跡、石帯や「壬子年」（652年）銘をもつ木簡が出土した三条遺跡がその南、本遺跡の東1.1㎞に存在する。菟原郡衙に比定される郡家遺跡は西3.0㎞に、その東に隣接する住吉宮町遺跡の23次調査では「橘東家」・「免」などの墨書土器、土馬・円面硯・瓦などが出土している。

当地には条里制の土地区画が良好に残されており、現在の市街の土地区画もこれを多く引き継ぐ。かつての字名は多く１町の田んぼごとに名づけられている。字図にしたがえば、調査地の字名は「琴田（コトダ）」・「横様」の区画にあたる。「横様」の西には条里の境界線上を直線的に流下する要玄寺川をはさんで「二ノ坪」・「一ノ坪」・「三ノ坪」などの古い字名が確認でき（図４）、現在でも「一ノ坪橋」という橋の名にその名が残されている。

縄文時代の波蝕崖は今回調査地の北約20mにある国道２号線にほぼ重なり、その南はそれ以降堆積した花崗岩起源の砂層が遺跡の基盤層となる。今回の調査地点は縄文時代の波蝕崖の南にあたり、砂層の上に遺跡が形成され、この砂層の下には湿潤な環境下で形成された黒色シルト層が厚く堆積する。この土層には分解した植物質が多量に含まれる。

平成６年、今回の調査地の南において行われた第１次調査では、この黒色シルト層が現地表下約1.7m以下において確認され、この層の上位において低湿地が陸化していく過程の堆積土に縄文時代晩期以降の遺物・遺構が残されていた。

図３　本山中野遺跡の位置と周辺の律令期の遺跡

１：郡家遺跡、２：住吉宮町遺跡、３：魚崎中町遺跡、４：本山遺跡、５：本山中野遺跡、６：北青木遺跡、７：井戸田遺跡、８：森北町遺跡、９：本庄町遺跡、10：深江北町遺跡、11：津知遺跡、12：六条遺跡、13：清水町遺跡、14：前田遺跡、15：寺田遺跡、16：月若遺跡、17：芦屋廃寺

縄文時代晩期から古墳時代後期の段階では低湿地そのもので遺構としては踏みしめ道の痕跡が確認できる程度であった。飛鳥時代初めに至り、この湿地を横断する道―両裾に土留めの杭・板を渡し盛土を行う幅約1.5m～2.0mの道―が敷設される。奈良・平安時代になると陸化の進んだことが花粉分析で明らかとなっており、この時期の土地区画の溝・盛土をもつ道等の遺構が検出されている。

平成17年に今回の調査地の南西で行われた第２次調査では、低湿地の地面に残された蹄跡群のほか、浅い溝程度と、顕著な遺構は確認されなかったが、洪水砂層から出土した遺物には緑釉陶器・瓦・墨書土器等が多くあった（図８・９）。これらの遺物は奈良時代から平安時代前半のものであり、この時期、調査地の北方に瓦葺の施設の存在したことが推定された。

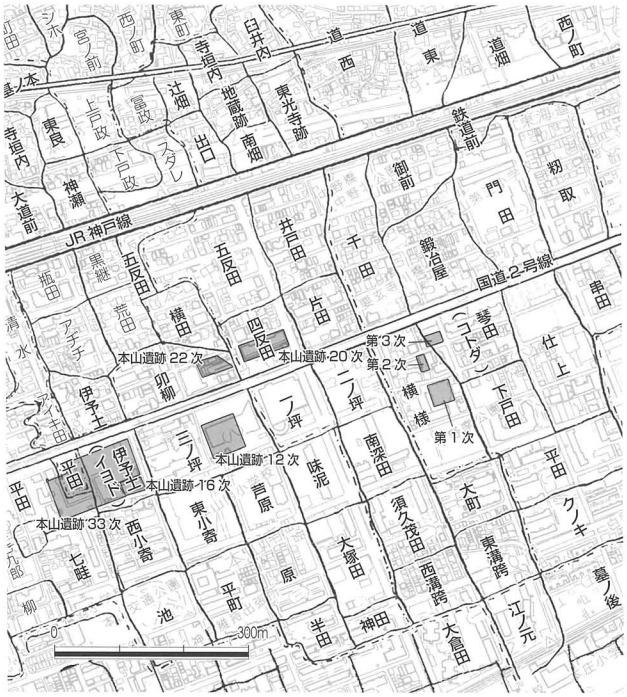


図４　周辺の字と調査地

字名は『本山村誌』1953・『本庄村誌 歴史編』2004および落合長雄「神戸市小字名集」『歴史と神戸』18-4･5 1981による。字名細字は「神戸市小字名集」に見えないもの。

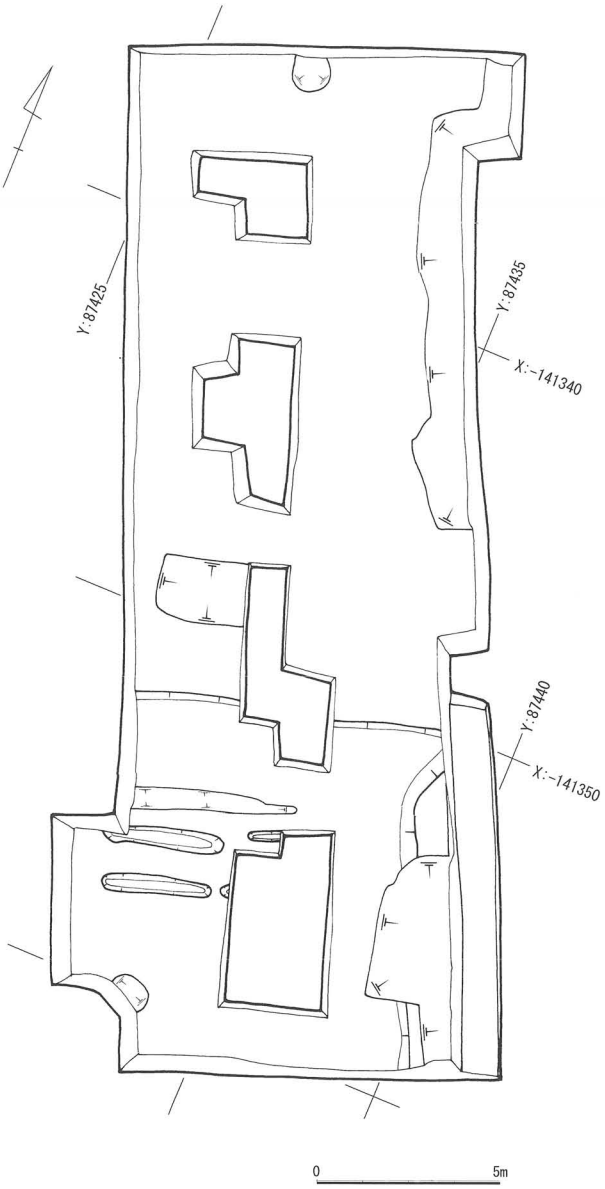


図５　第２次調査第２遺構面平面

図６　第２次調査地北半第２遺構面（南から）

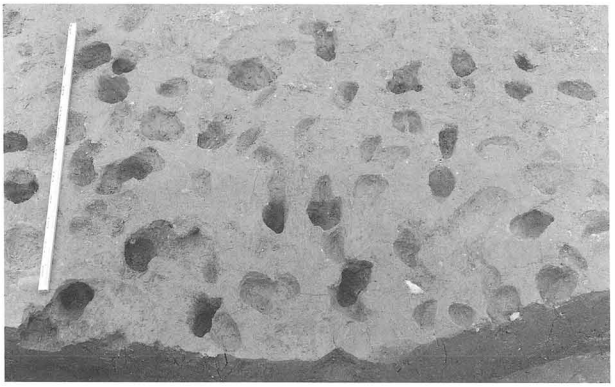


図７　第２次調査地第２遺構面足跡（東から）

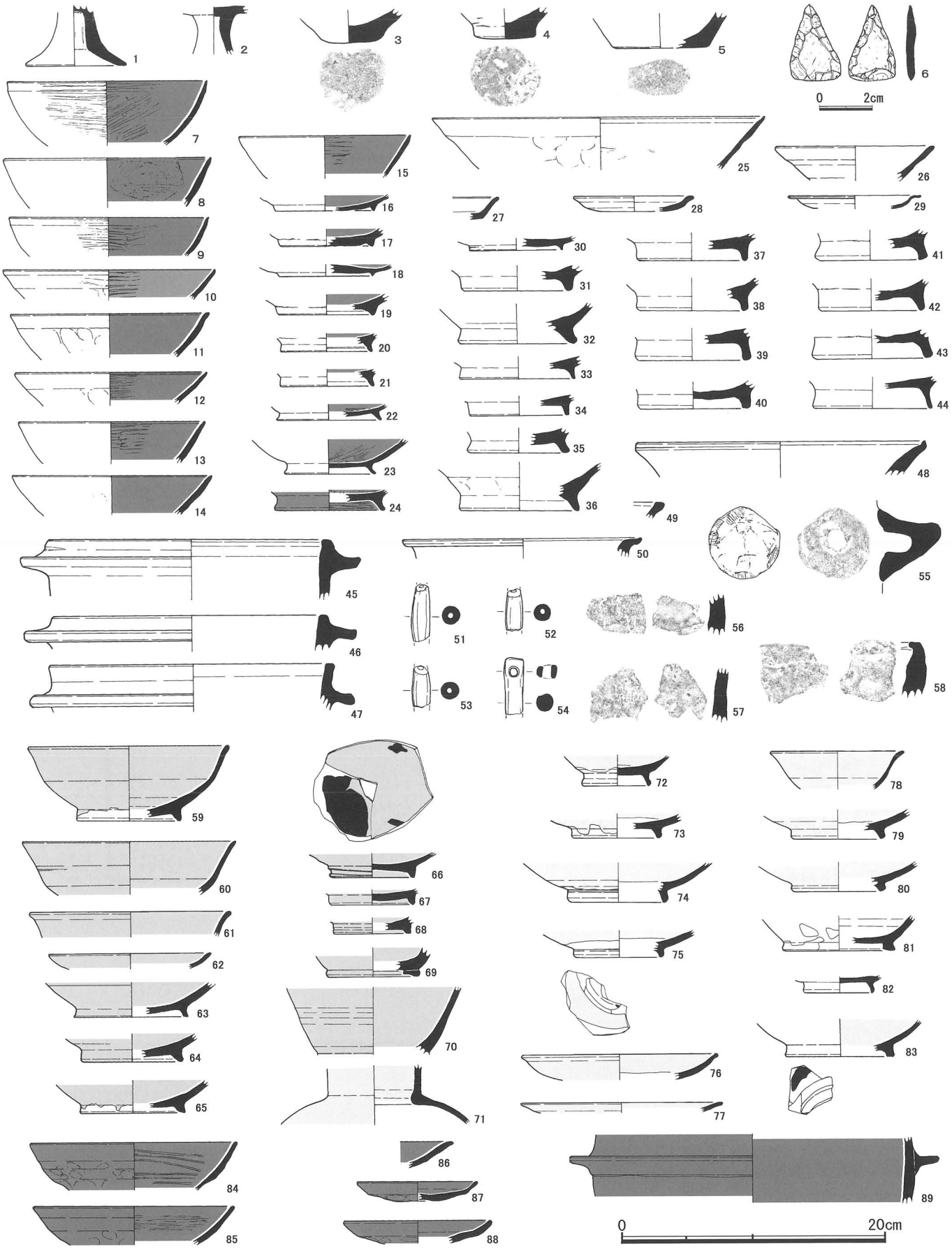


図８　第２次調査地出土遺物〔１〕

1・4・5・7～24・28～30・26・34・36・44・46・47・48・51～89：5層、2・3・6・27・35・49：6層、25・31・45・50：4層（1～5：弥生土器、6：サヌカイト石器、7～24：黒色土器、25～58：土師器、59～70：緑釉陶器、71～83：灰釉陶器、84～89：瓦器／66･87:墨あるいは煤の付着する土器、175：墨書土器）

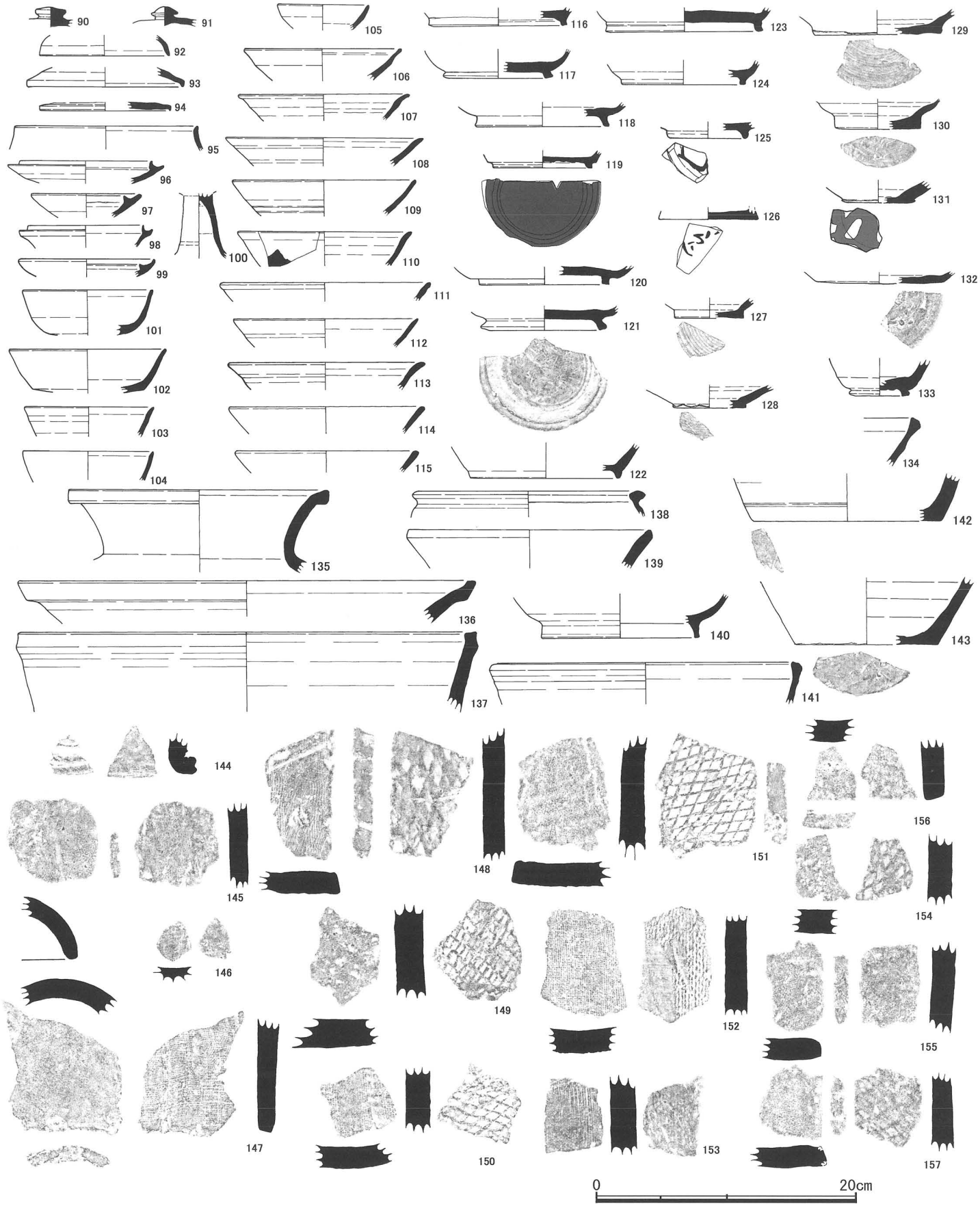


図９　本山中野遺跡第２次調査地出土遺物〔２〕

90・92～96・98～101・104～106・108・110～115・117～119・121・122・124～129・131・133・135・136・139～142・145～148・150～152・154・155：5層、91・97・103・107・116・120・123・130・132・137・138·143・156・157：6層、102・109・134：4層、144・149：試掘調査時、153：3層
(90～143：須恵器、144～157：瓦　/　125・126：墨書土器、110・119・131：墨あるいは煤の付着する土器)

Ⅱ．第３次調査の概要

マンション建設によって埋蔵文化財が破壊される部分（図10）について、その工事に先立ち発掘調査を行った。調査の結果、遺構面３面が確認された。

層序　基本層序は以下のとおり（図13）。

1a：現表土及び撹乱土
2a：宅地化以前の旧表土＝耕土
2b：平安時代初めの遺物を多く含む洪水砂
3a：平安時代頃の表土
3c：奈良時代？洪水砂
4a：飛鳥時代～奈良時代？の水田耕土
4b：古墳時代後期？の洪水砂
5a：古墳時代後期？の表土、これ以下同様の湿地状の土壌が厚く堆積

各遺構面の概要は以下の通り。

第１遺構面　第１遺構面に対応する表土層である3a層およびこれを覆う洪水砂である2b層からの出土遺物は、土層掘削時の混入品と思われる新しい時期の遺物が少量認められるが、平安時代前期から中期のものが主体となる。

須恵器・土師器のほか、緑釉陶器・灰釉陶器が比較的多く出土している（図14・15）。ただし、調査地東半、とくにその北部における遺物包含層の掘削はともに洪水砂である2b層から3b層の区別が行えず、一気に第２遺構面まで掘り下げてしまい、この間の遺物を同じ洪水砂出土として取り上げてしまった。したがって2b層として取り上げた遺物のなかには3b層のものが一定量混入している。

2b層出土の遺物に平安時代後半のものが少量見られることからすると、第１遺構面はおよそ平安時代を通しての地表面と推定される。

遺構としては掘立柱建物４棟以上・井戸状の水溜め３基、土器溜まり等が検出された。

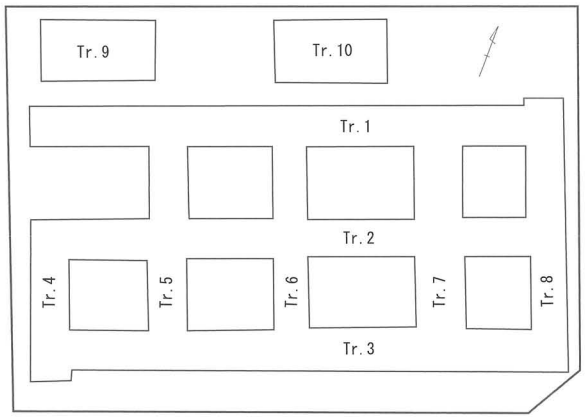


図10　調査トレンチの位置　0　10m

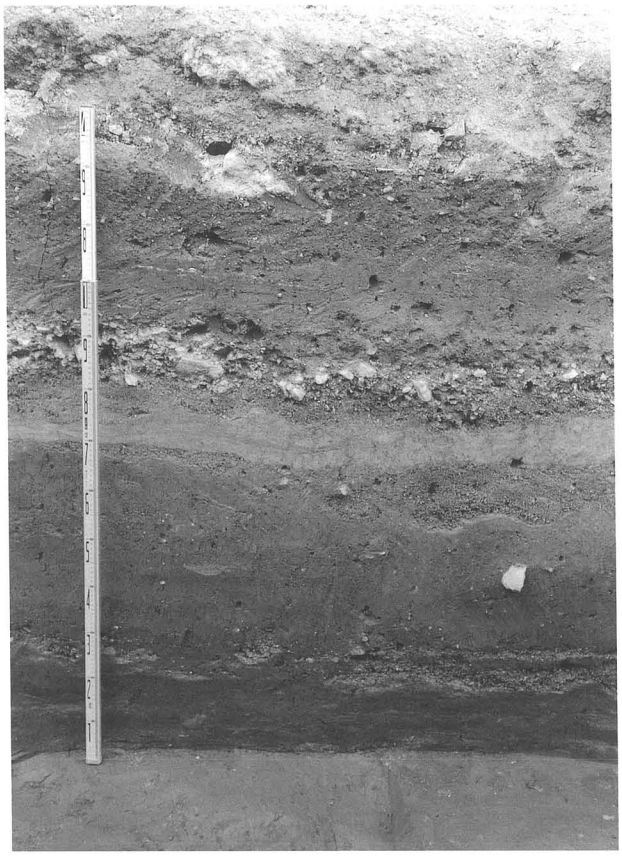
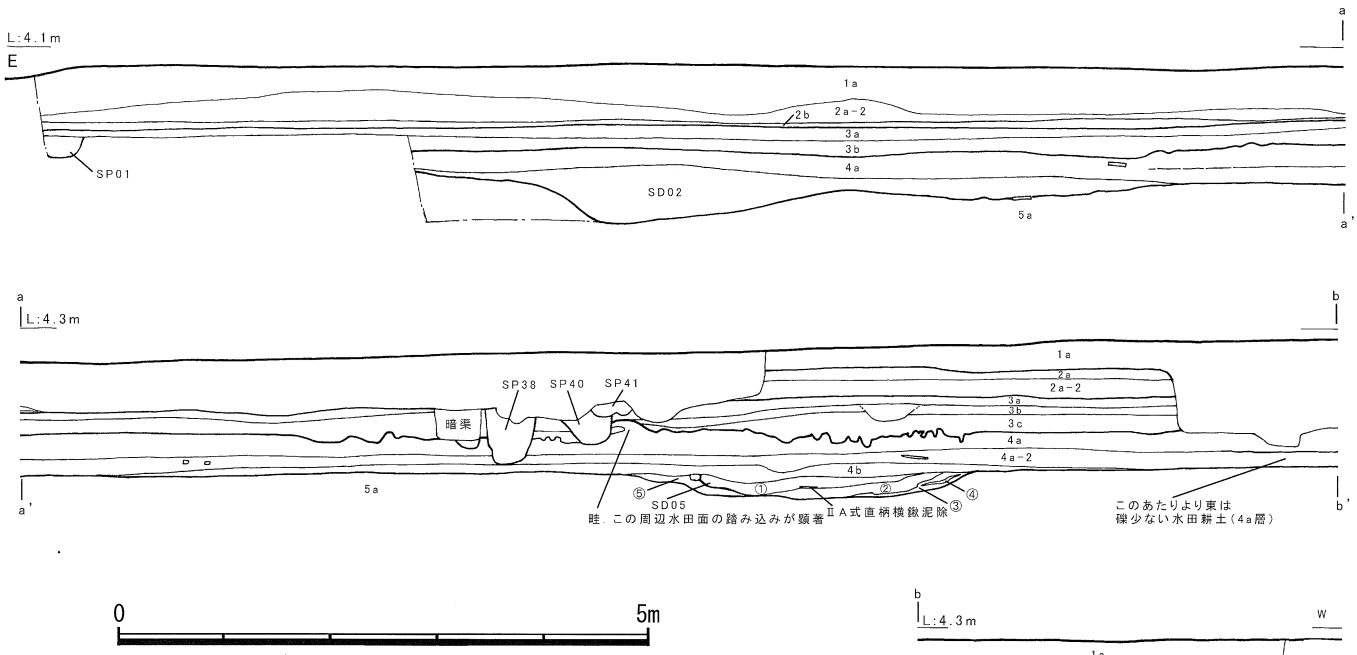


図11　第３トレンチ南壁　水田畔・踏み込み跡が見える

図12　第１トレンチ南壁と第２遺構面に残る足跡



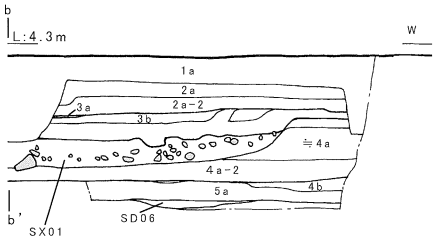


図13　第３トレンチ南壁土層断面

1a：現表土及び撹乱土、2a：宅地化以前の耕土、2b：淡灰褐色シルト交じり砂礫.
　須恵器・土師器のほか緑釉陶器・灰釉陶器等を含む洪水砂. 下面が第1遺構面、
3a：暗褐灰色シルト質砂礫、3b：褐灰色シルト交じり砂礫、3c：褐灰色砂.
　瓦･須恵器・土師器を含む洪水砂. 下面が第2遺構面、
4a：黒褐色シルト質粘土. 洪水砂に覆われる水田耕土、4a-2：黒褐色シルト質粘土、
4b：黒褐色砂交じり粘土. 洪水による堆積土？下面が第3遺構面(その１)、
5a：黒褐色シルト質粘土. 下面が第3遺構面(その２)

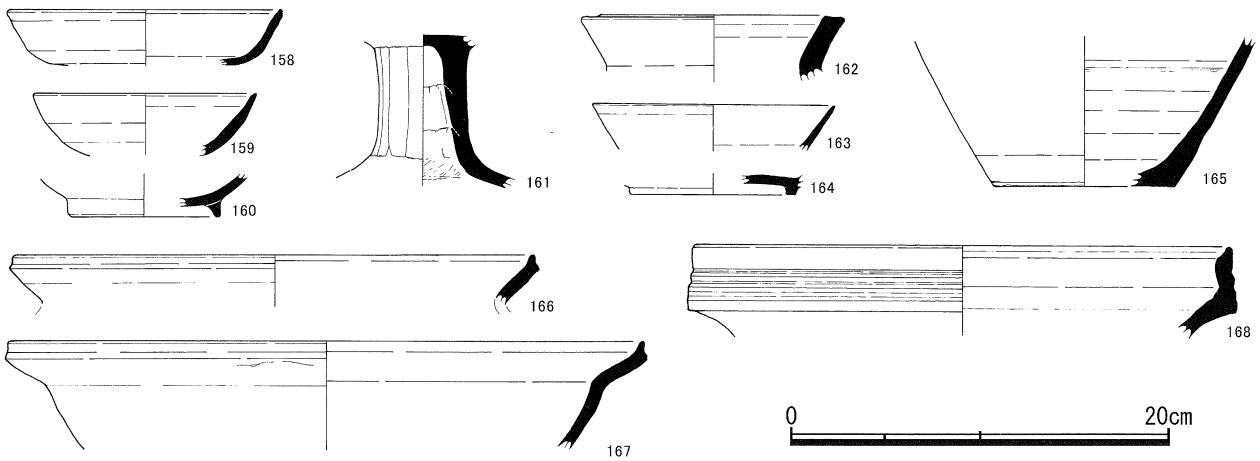


図14　１層出土の遺物 (158～161・166・167：土師器、162～165：須恵器、168：備前焼)

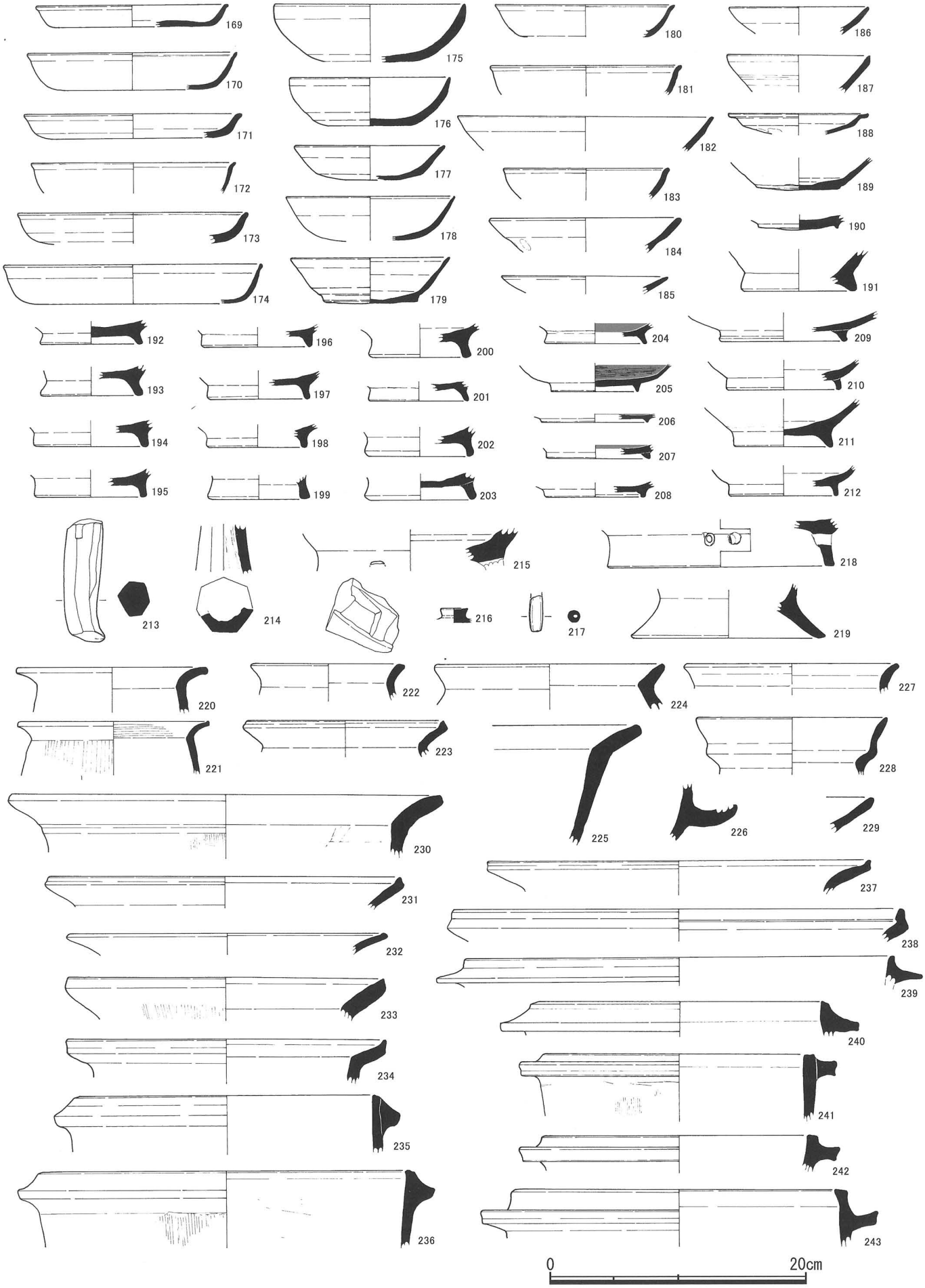


図15　２層出土の遺物〔１〕（169～203・208～243：土師器、204～207：黒色土器．215のアミは破断面）

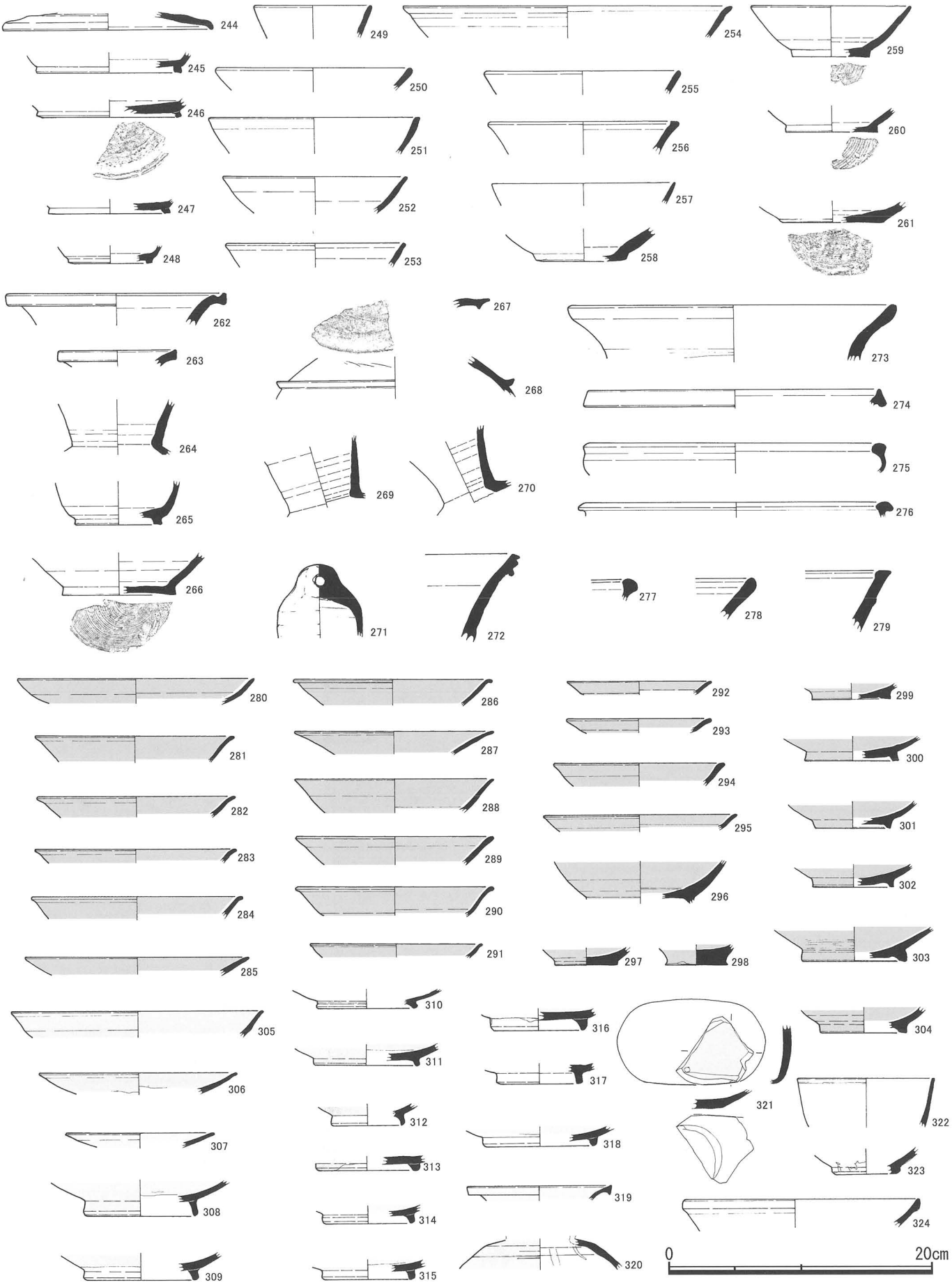


図16　２層出土の遺物〔２〕（220～243：土師器、244～279：須恵器、280～304：緑釉陶器、305～321：灰釉陶器、322：青磁、323・324：白磁）

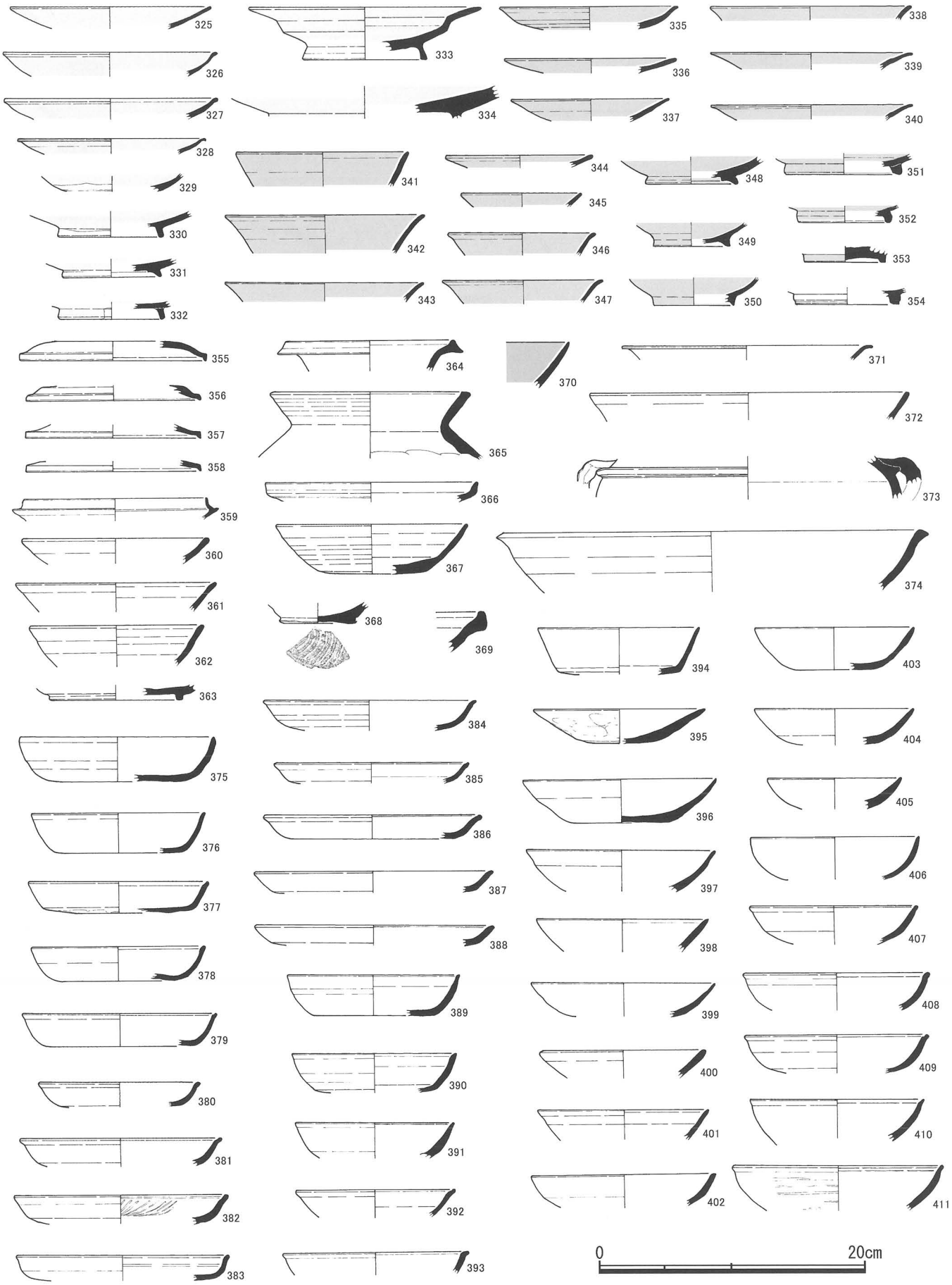


図17　3a層出土の遺物〔1〕（325 ～334：灰釉、335～353：緑釉陶器、354～369・371～374：須恵器、370：青磁）

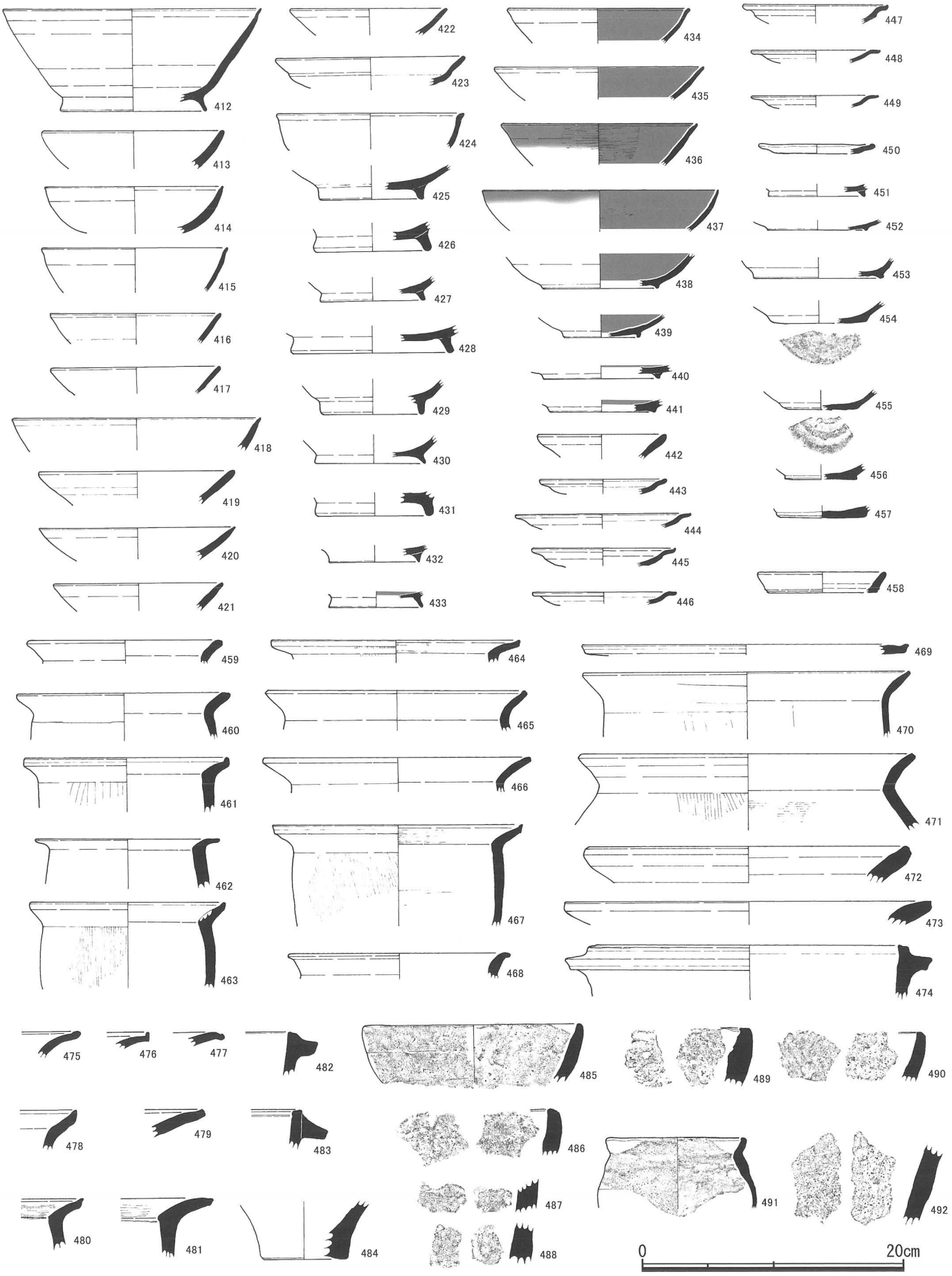


図18　3a層出土の遺物〔2〕（375～432・442～492：土師器、433～441：黒色土器）

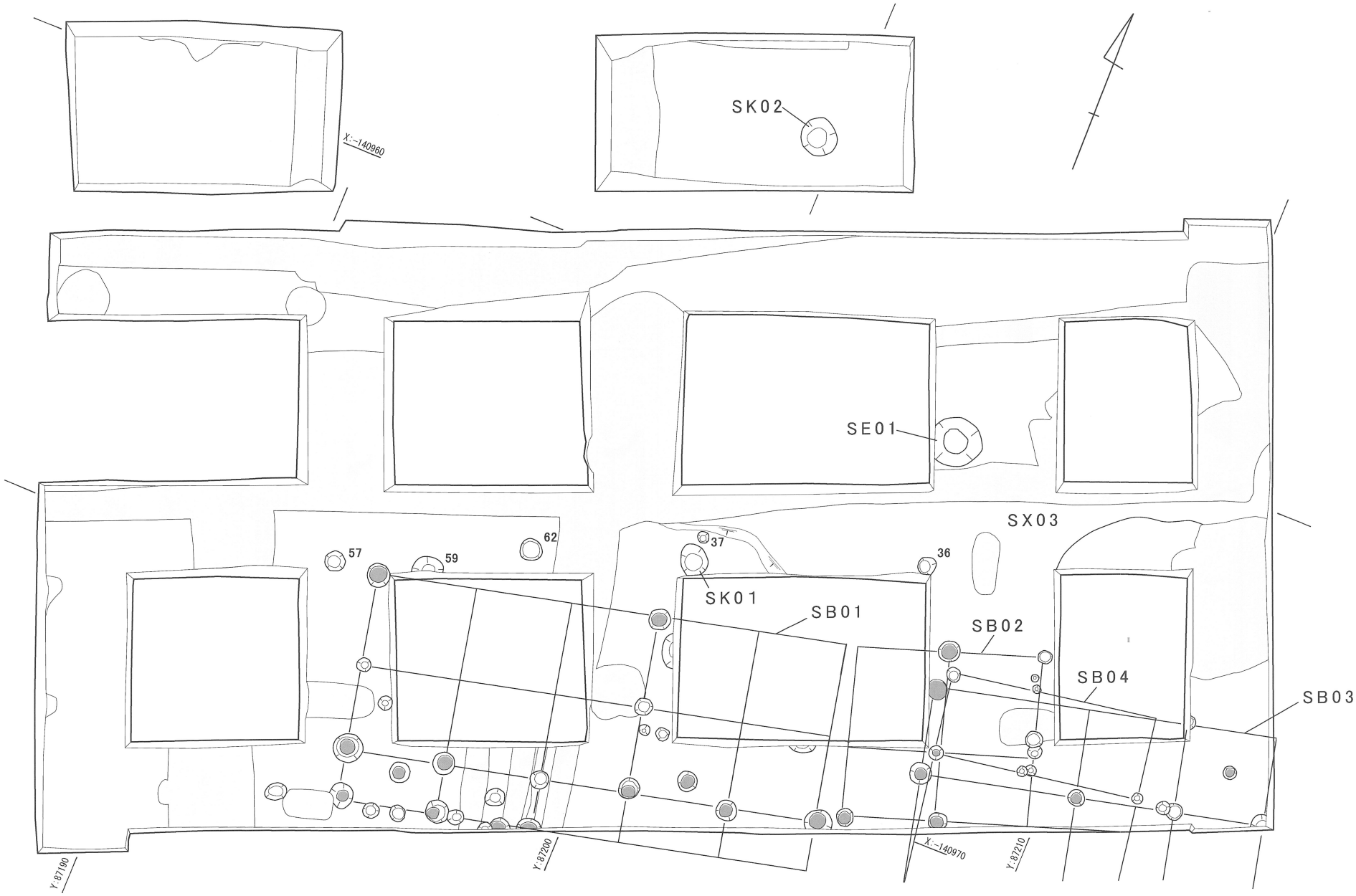


図19　第１遺構面平面 濃アミ部分は柱痕、淡アミ部分は撹乱

0　10m

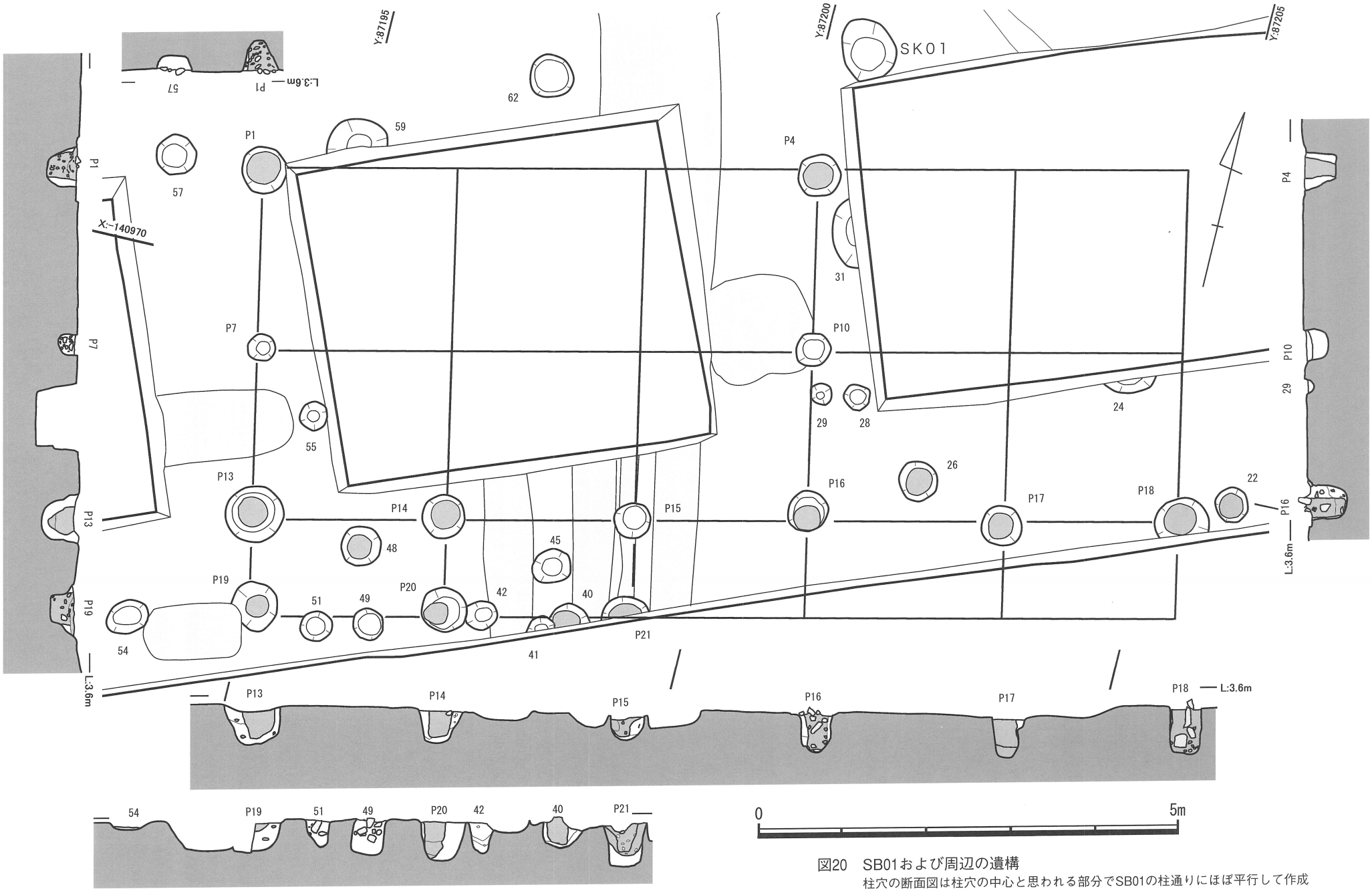


図20　SB01および周辺の遺構
柱穴の断面図は柱穴の中心と思われる部分でSB01の柱通りにほぼ平行して作成

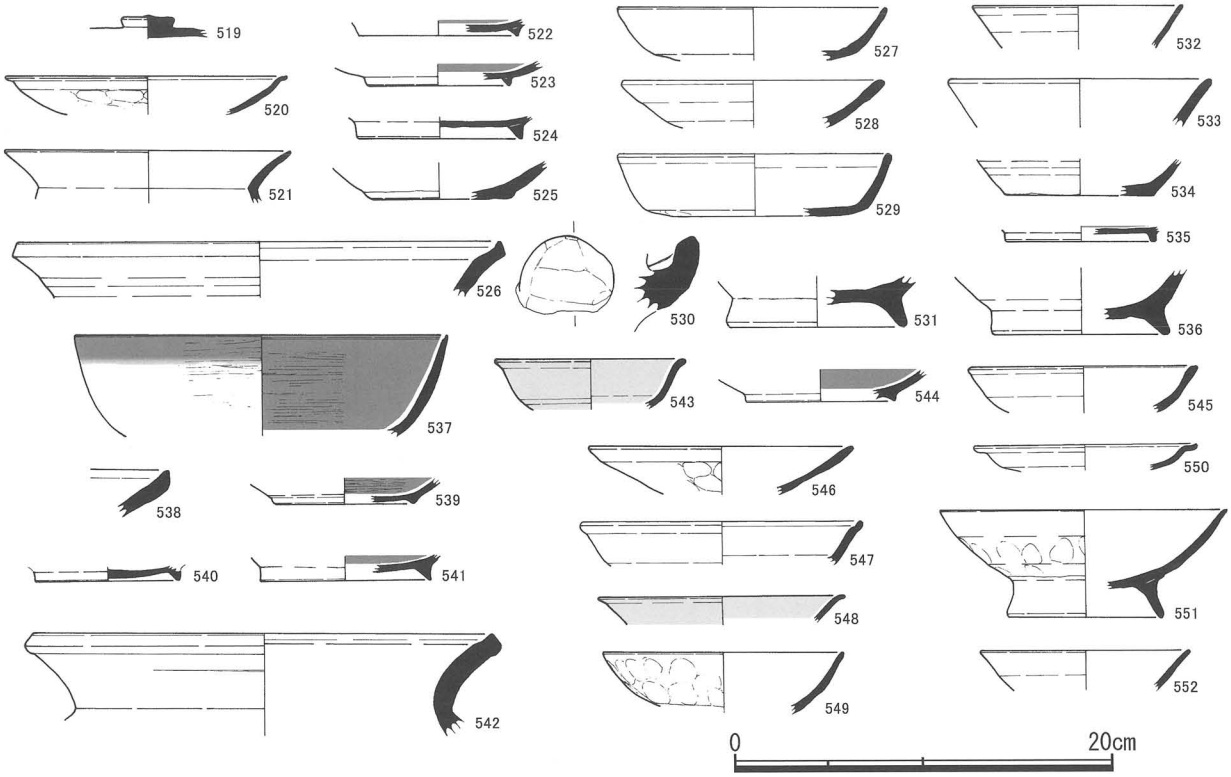


図21　SB01出土の遺物

519・522・523：P01、520・521・524～526：P01柱痕、527：P04柱痕、528：P04、529・530：P13、531～536：P14柱痕、537～542：P16柱痕、543・544：P17、545：P18、546：P19、547：P19柱痕、548・550・551：P20、549：P20柱痕、552：P21（519・526・532・534・542：須恵器、520・521・524・525・527～531・533・536・538・545～547・549～552：土師器、522～524・535・537・539～541・544：黒色土器、543・548：緑釉陶器）

SB01　南面に庇が付く２間×５間（約5.2m×約11.0m）の東西に細長い建物。柱間は2.1mほどと広い。火災に遭い、その後焼け残った柱根が抜かれている。抜き跡には火災時の焼土が流れ込み、その中に土器等の遺物が多く含まれる。抜き跡の大きさから柱の直径が30cmを超える太いものであったと推測される。

SB02　SB01の東に位置する柱間2.1mほどの掘立柱建物。東西２間分・南北２間分を確認した。その南部は調査地外に続く可能性があり、東にも１間分大きくなる可能性がある。SB03・SB04と重なる位置にあり、両者との同時存在はありえない。図示できる遺物の出土はなかった。

SB03　SB02・SB04と重なる位置にある掘立柱建物。東西３間分・南北１間分を確認した。その南部および東部は調査地外にひろがる。西辺柱列とその東隣の柱列の間隔は約2.2mとその他の柱の東西間の間隔約3.3mと比べ1.5倍ほど広くなっている。間にもうひとつ柱列の存在した可能性がある。そう考えてよいならば柱間の関係から東に（さらに南にも）庇のつく建物であった可能性が考えられる。この建物の設計ラインはSB01と共通であり、両者が東西に並んで存在した可能性が考えられる。

SB04　SB02・SB03と重なる位置にある掘立柱建物。東西２間・南北１間分を確認した。その南部は調査地外にひろがっている。SB01～03に比べ柱穴が小さい。

このほかにも掘立柱建物の一部となる可能性のある柱穴があり、建物はこれら以外にも存在すると考えられる。

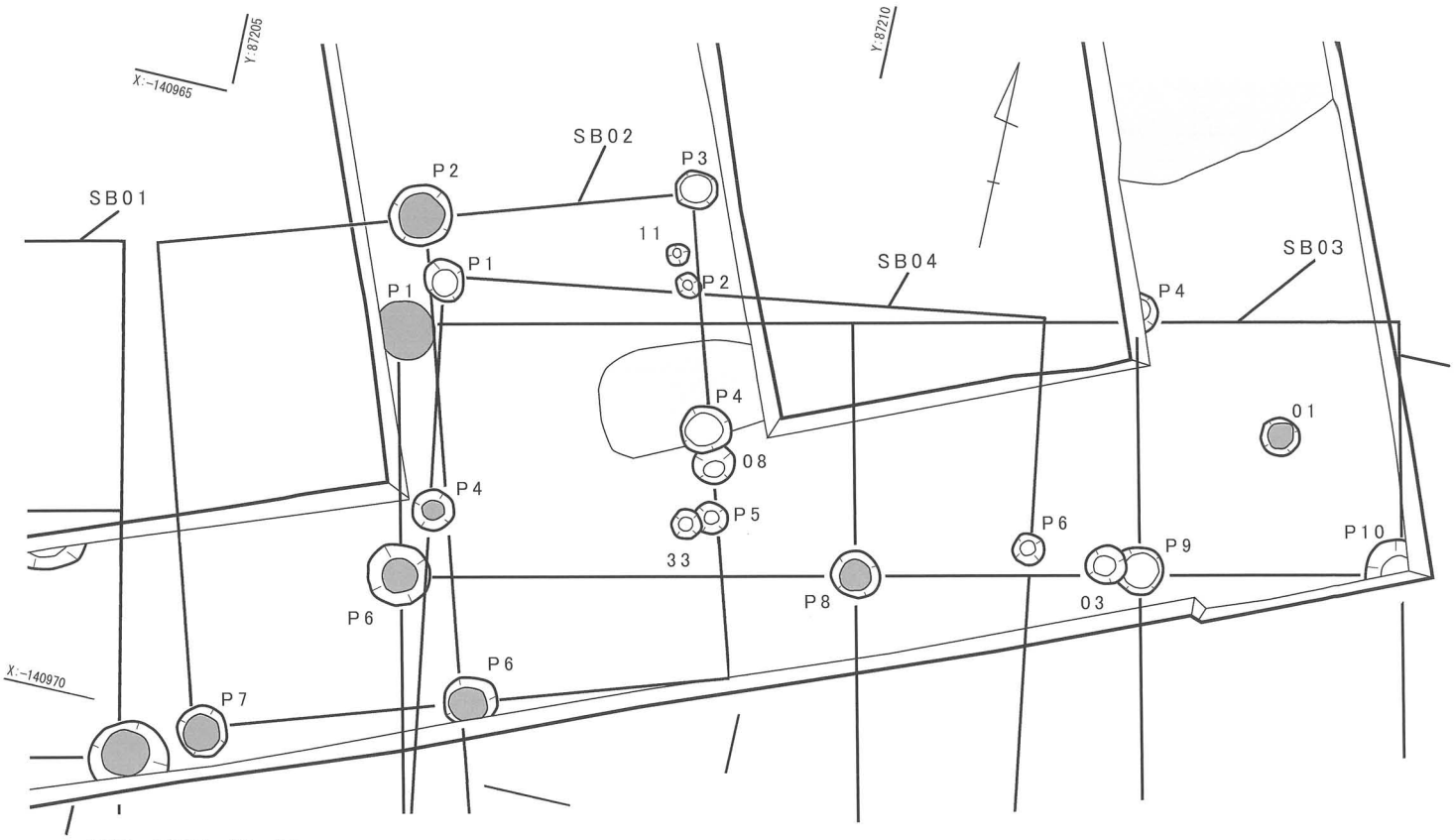


図22　SB02・03・04

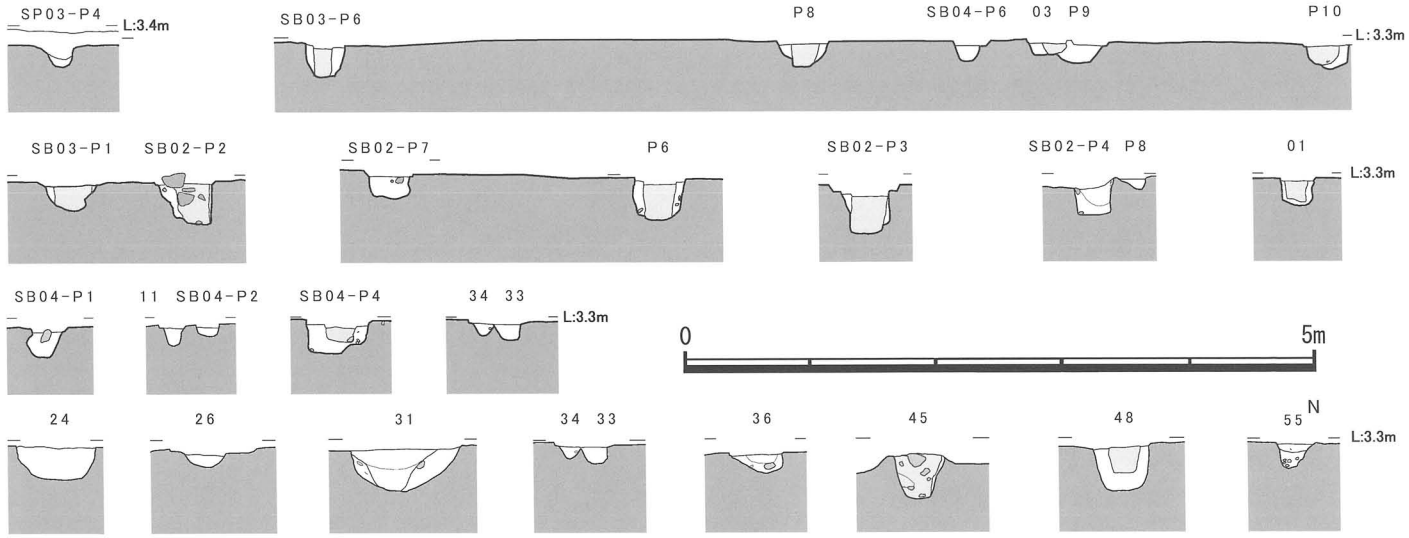


図23　SB02～04およびその他柱穴の土層断面　柱穴の断面図は柱穴の中心と思われる部分で柱通りにほぼ平行して作成

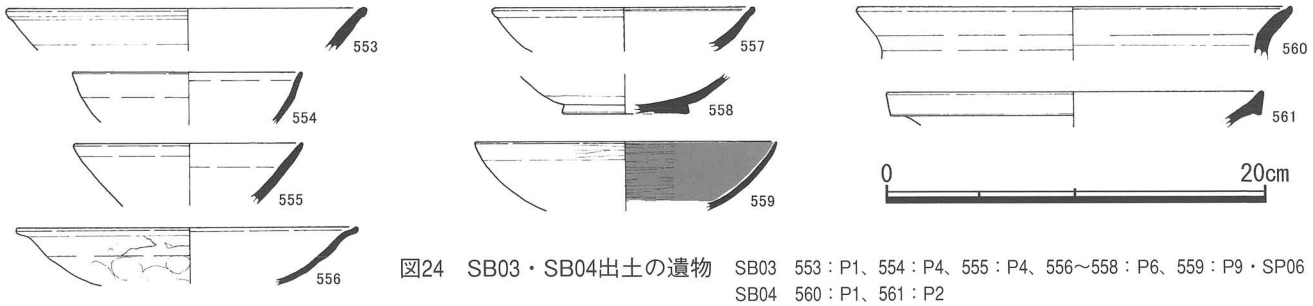


図24　SB03・SB04出土の遺物　SB03　553：P1、554：P4、555：P4、556～558：P6、559：P9・SP06
SB04　560：P1、561：P2
（553・555・561：須恵器、554・556・557・559・560：土師器、558：白磁）

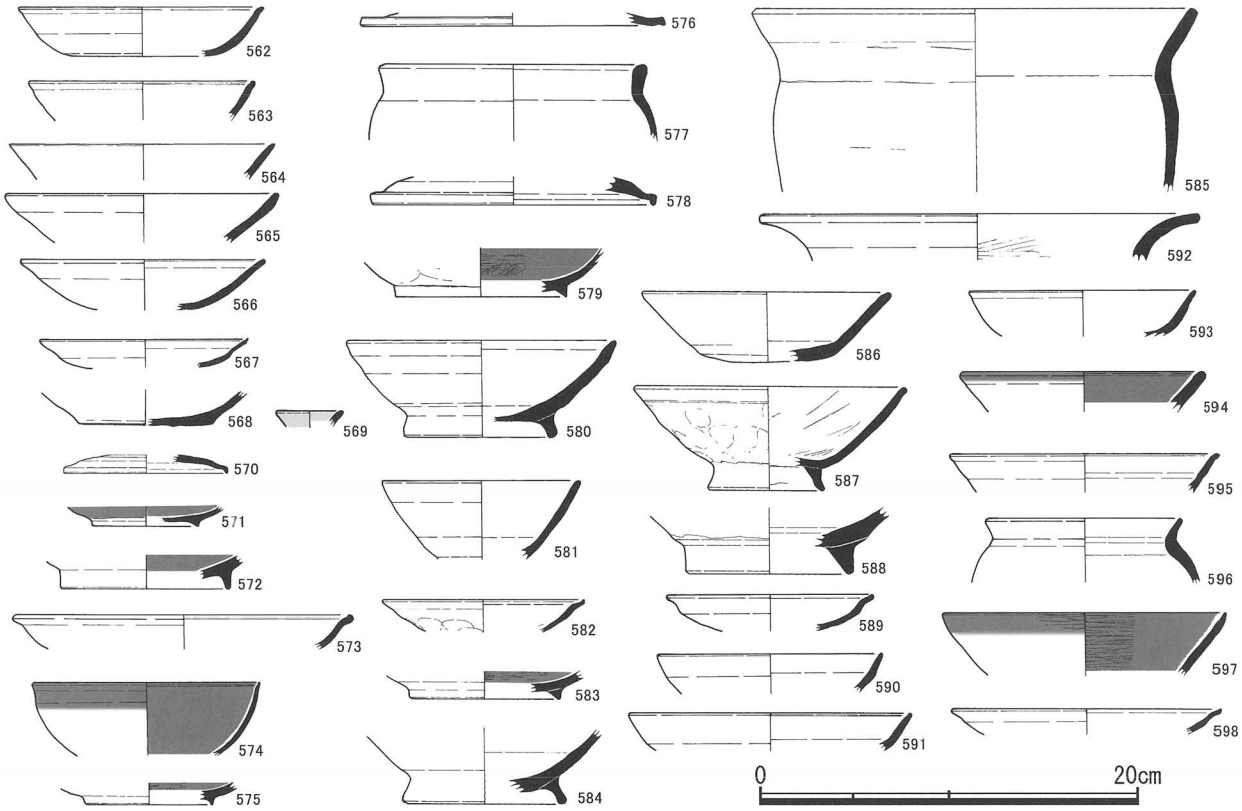


図25　柱穴出土の遺物

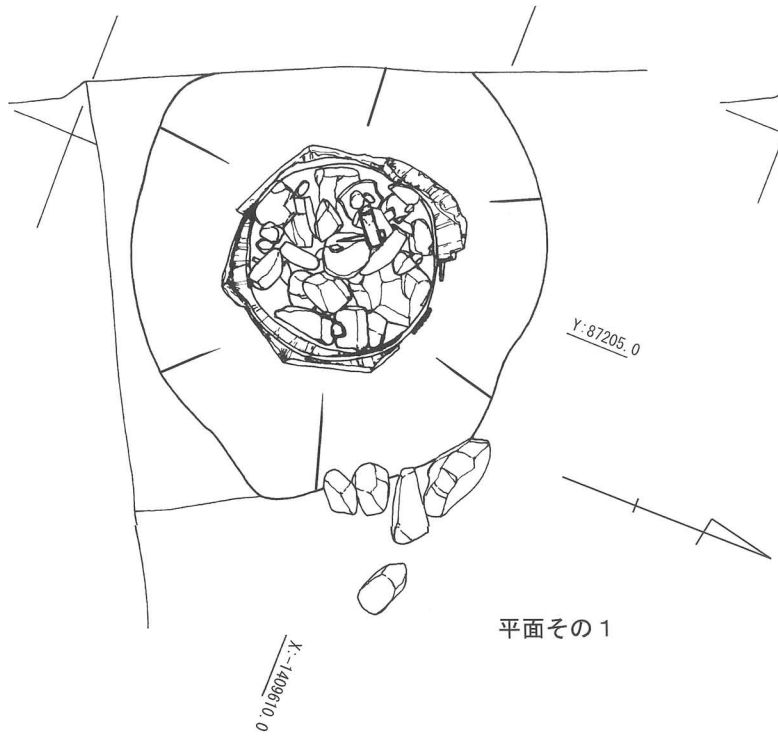
562～564：SP01、565：SP03、566～569：SP24、570～572：SP26、573・574：SP31、575：SP33、576・577：SP40、578・579：SP42,580：SP48、581～583・585：SP49、584：SP51、586：SP52,587：SP52掘り方・SP49、588：SP54、589：SP55,590：SP57、591～595：SP59、596～598：SP63

（564・570・576・578・581：須恵器、571・572・574・575・579・583・594・597：黒色土器、569：緑釉陶器、その他：土師器）

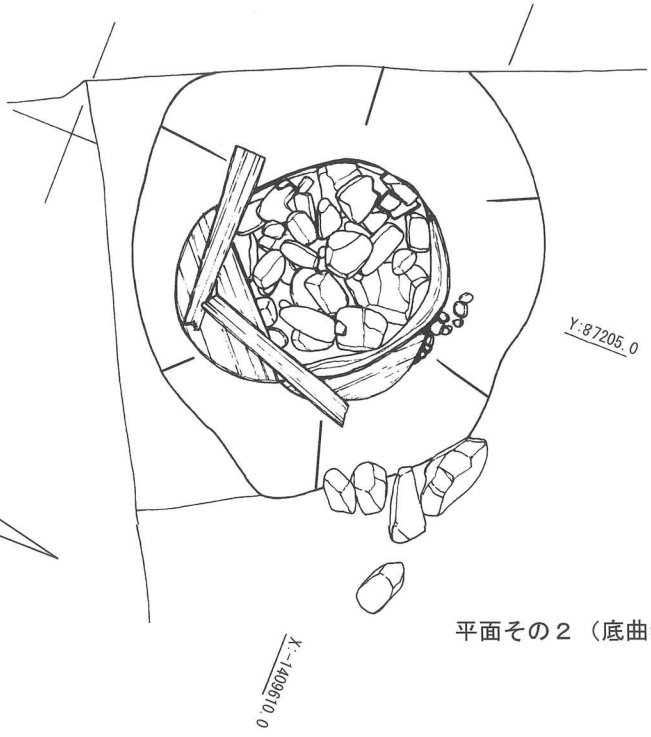
SE01　井戸状の遺構。形状的には井戸そのものであるが、断ち割りをした結果、井戸底にあたる部分までに湧水層がないことを確認した。井戸ではなく水溜めと判断した。

掘り方底に底板を抜いた長径約71cm・短径49cm・高さ16cmの曲物を置き、その内部に石を敷き詰め、その上にクスノキの幹を刳り貫いた残存高49cm・外径58cmの円筒形の枠を据え、その外側に８枚のスギの縦板を寄せるという構造をもつ。刳り貫き枠の径が曲物の長径よりも小さいため、これを置いた際、曲物がかぶさらない部分には、土砂の流入を防ぐため、はずした曲物の底板でこれをふさいでいる（図27・図版４）。

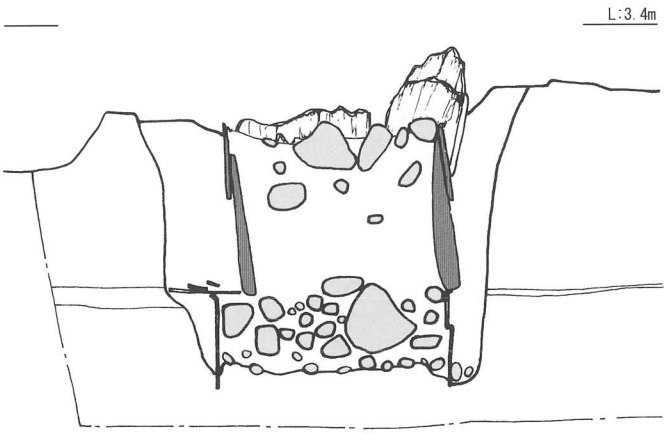
図26　SE01（東から）



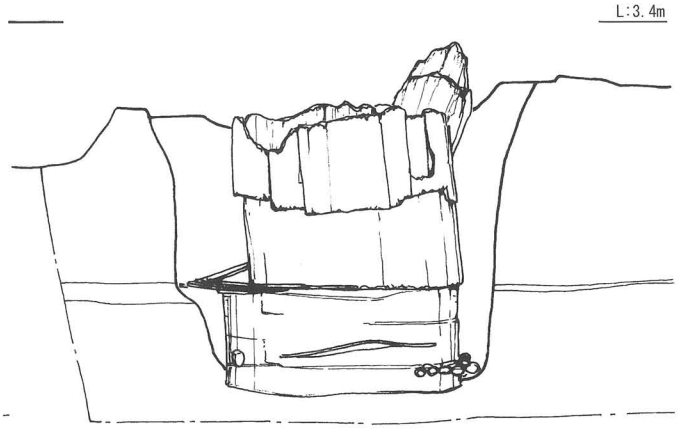
平面その１



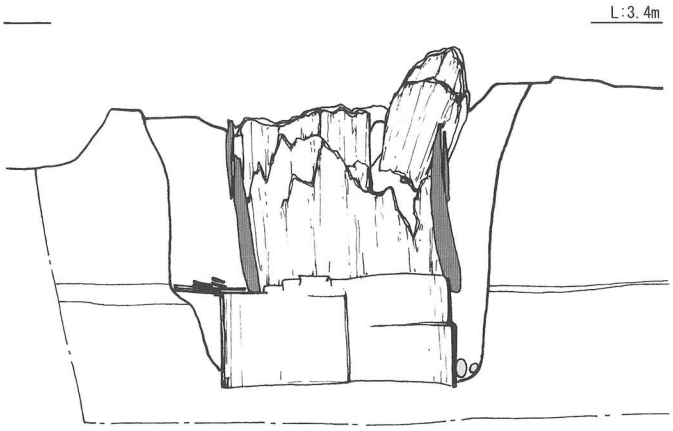
平面その２（底曲物）



土層断面



枠見通し



枠断面および内部見通し

図27　SE01

図28　SE01底礫敷き上遺物出土状況

底面礫敷き直上からは木製品・土師器杯が、また礫敷き内から土師器杯およびガラス玉１点（図29・図版５）が出土した。土師器杯４点は墨書があり、「南」３点・「木工」１点を確認できた（図30・図版５）。

奈文研渡辺晃宏氏からこれらの文字は土師器の所有者あるいは帰属を示すもので、「南」はこの食器があった施設の南部にある区画や建物等の所有物であることを示すものであり、「木工」も、木工作業を行う場所があり、そこの所有物であることを示しているとのご教示を得た。

ガラス玉は平面形が正円に近い楕円形で、長径が7.3㎜、厚さは4.3㎜、重量0.46ｇを測る。色調は透明度の高い暗緑色を呈し、表面の腐食はあまり見られない。中央に開けられた孔の孔径は挿図での上方が3.3㎜、下が2.7㎜である。孔内は平滑で内面には紐など有機質の残存は見られなかった。また孔端部には王冠状のバリが残り、本体内部に包埋される気泡がほぼ球形を呈する。孔内が平滑であることは引き伸ばし技法による製作を示唆し、バリの存在は連珠法を示唆するものと考えられる。

玉の素材についてであるが、奈文研保存修復科学研究室のご協力を得、その表面について蛍光Ｘ線分析法を用いて分析したところ、半定量値で（鉛：51.17％、ケイ素46.70％、アルミニウム：1.08％、カリウム：0.35％、その他微量元素は略）との結果が得られた。これに合わせ比重測定値が5.11（通常、鉛ガラスは5.0～5.7、鉛バリウムガラスは3.75～4.3、アルカリガラスは2.1～2.7程度に集中する）を示したことなどからも、このガラス玉が鉛ガラスであると判断できる。

このほか、水溜めの底面付近および礫敷き内には木質遺物が多く遺存していた。木製品としては一辺４㎝弱の角材に細長い三角錐状の歯が差し込まれる馬鍬状の木製品片、土圧のためか本来の形状なのか不明であるが扁平となっている中空の棹状木製品―複数の円い穴が穿たれる―等がある。

また種子等も多く遺存し、これについては同定を行った。その成果はⅢ章のとおりで、モモ・イネ・ヒョウタン類・メロン類、ナス科、ムクノキをはじめ、クワ属・クスノキ科・アカメガシワ・サンショウ属・センダンなどの高木になる樹種や、ブドウ属・ノブドウ・ブドウ科などの籐本類、沈水植物のイバラモ属、抽水植物のミズアオイ属、抽水～湿生植物のオモダカ科・ホタルイ属や、湿生植物のタガラシ・ゴキヅル？・スズメウリなどの存在が確認された。これにより、近隣に水田と推定される水湿地の存在が推定され、さらに平安時代はじめころの食用などの植物利用の一端などが明らかになっている。

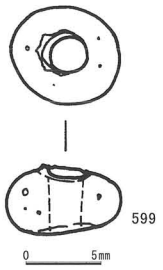


図29　SE01出土の遺物〔１〕（599：鉛ガラス）

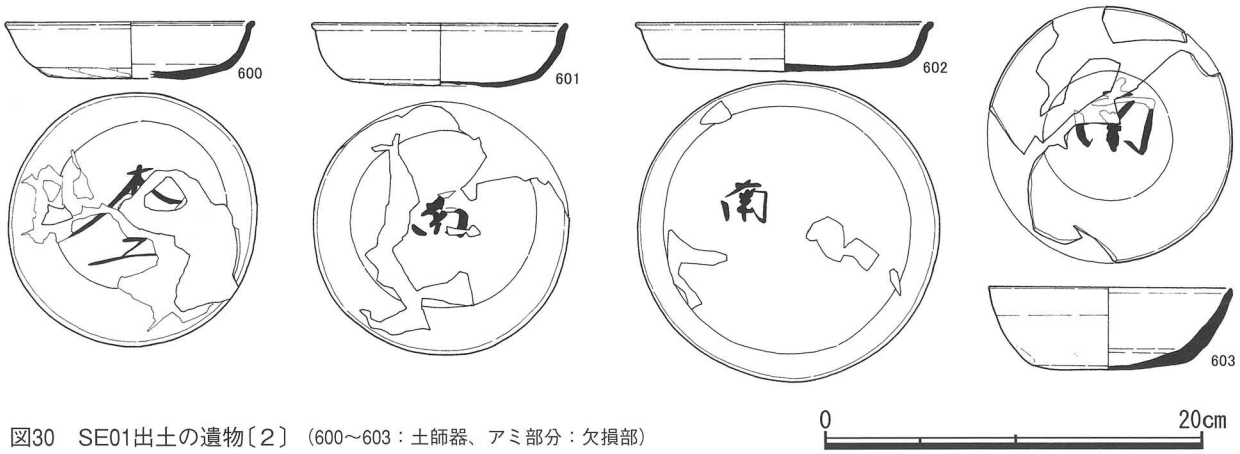


図30　SE01出土の遺物〔２〕（600～603：土師器、アミ部分：欠損部）

SK01・SK02　これらもSE01同様、水を通さない黒色粘土中に掘り込まれた土坑で、底に曲物枠を置く。SK01の曲物は直径41cm、残存高16cm、SK02のものは直径約46cm、残存高15cmを測る。両者とも石で埋められ、変形している（図31・32、図版3-2・3）。

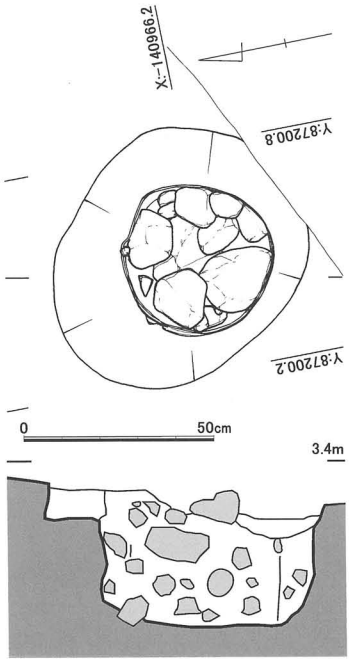


図31　SK01

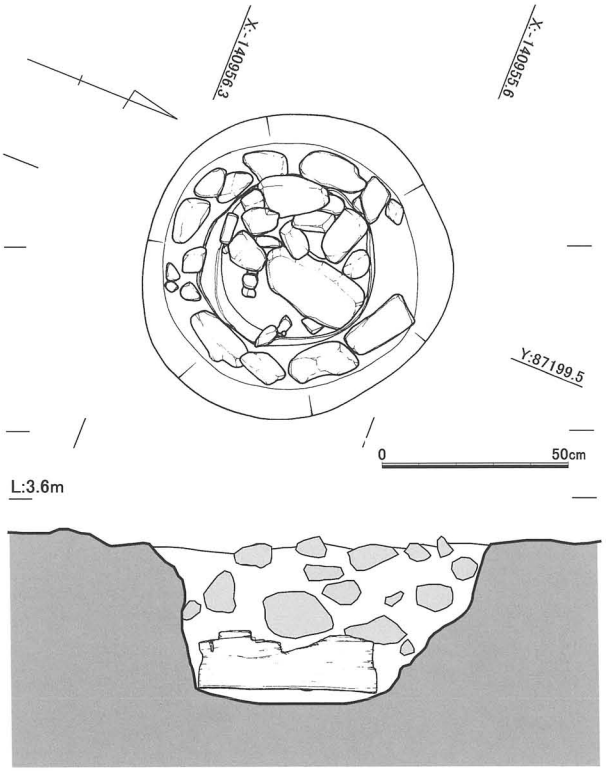


図32　SK02
断面曲物のみ見通し、平面は曲物上面検出時の状況

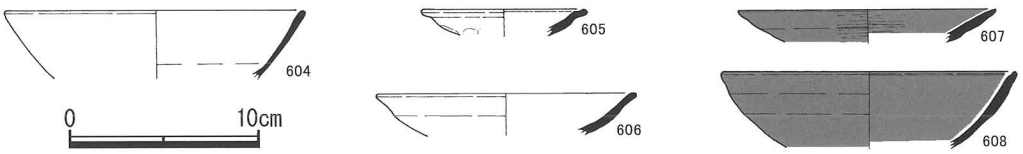


図33　SK01出土の遺物(604)・SK02出土の遺物(605～608)（604：須恵器605・606：土師器、607・608：黒色土器）

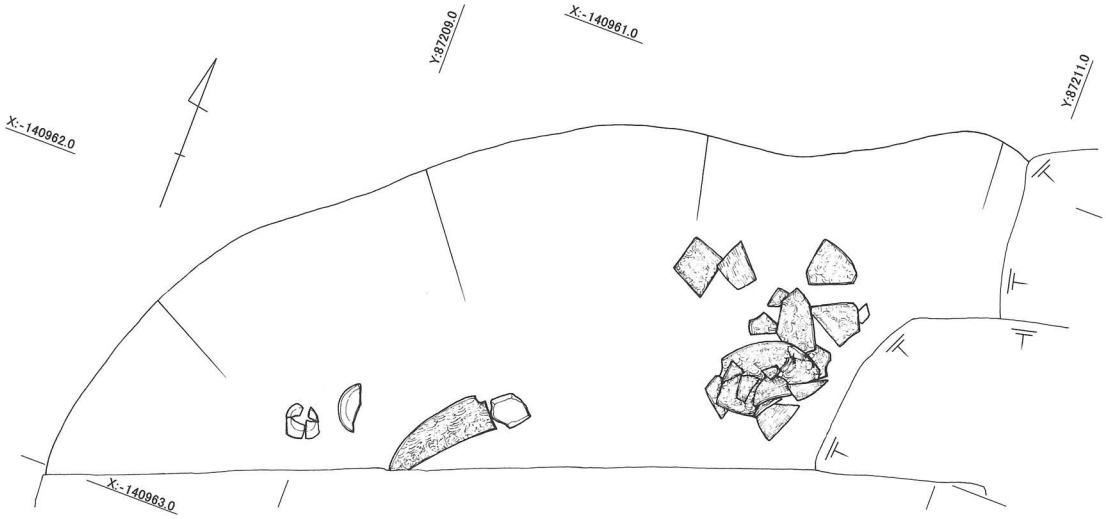


図34　SX03遺物出土状況

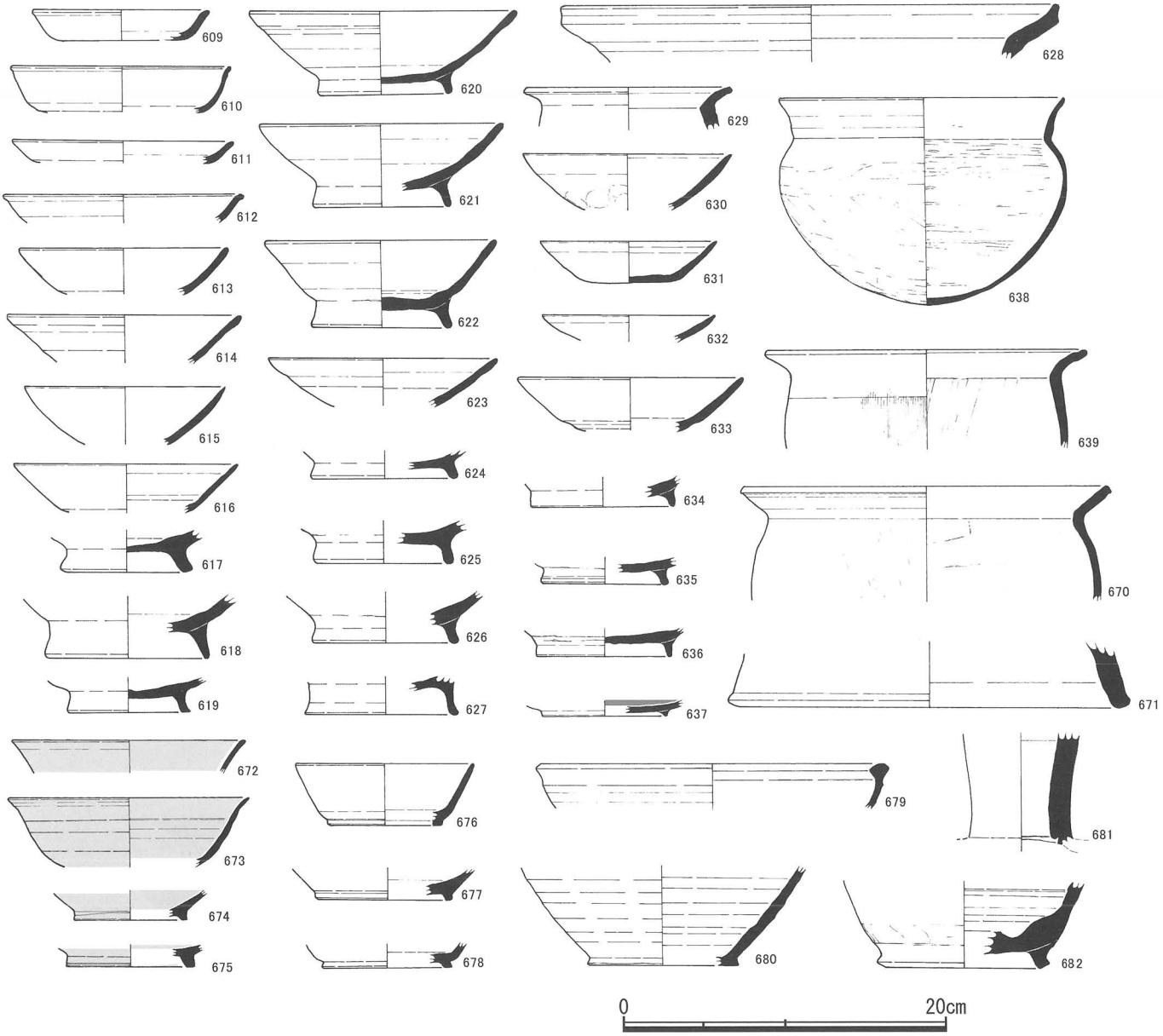


図35　SX02出土の遺物（609～636・638～671：土師器、637：黒色土器、672～675：緑釉陶器、676～682：須恵器）

SX02　第７トレンチ南部、SB02のP2・P3・P4付近、すなわちSB02の北西部あるいはSB03・SB04北西部に当たる位置で、4a層中に特に遺物の集中する部分があり、これをSX02とした。遺構としての凹み等は確認できず、たまたま遺物の出土が集中しているだけなのか、建物内におかれていたものが火災で焼け落ちたため等の理由により集中しているのか判断できない。

SX03　第２トレンチ東部で検出された、広く浅い落ち込み。須恵器の大型甕などが出土している（図34・36、図版3-4）。

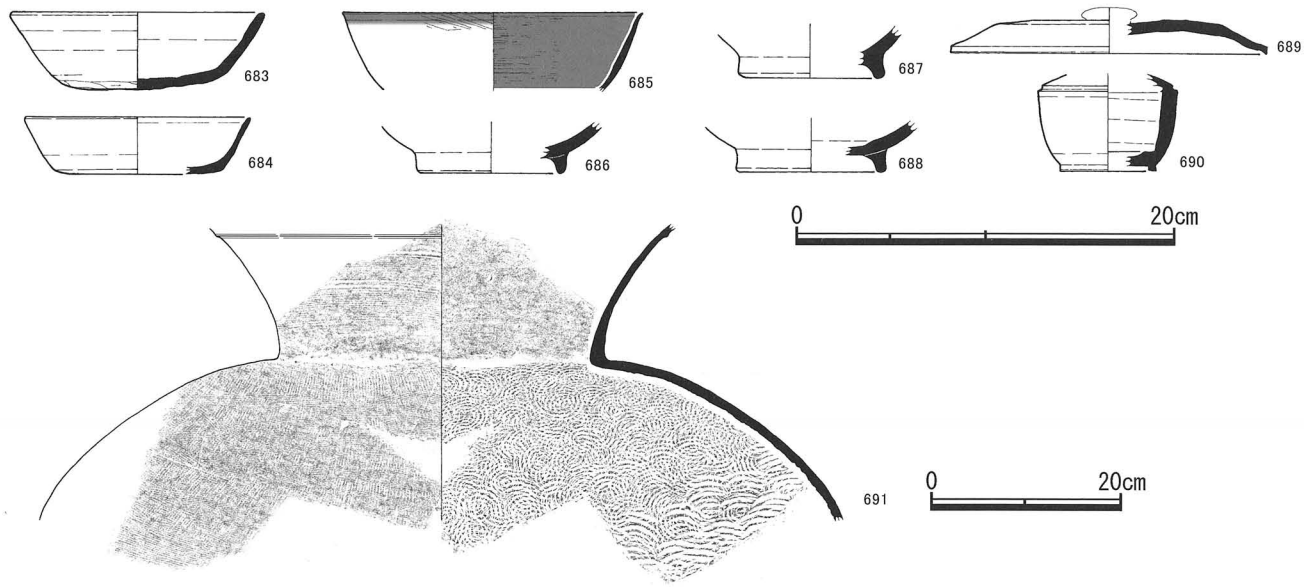


図36　SX03出土の遺物（683・684・686～688：土師器、685：黒色土器、689～691：須恵器）

第２遺構面　洪水砂である3c層に覆われる遺構面。水田が検出された。調査区の西部では条里を引き継ぐ現在の街区にほぼ合致する方向の畦や段が確認できるが、北部の第10トレンチで確認できたものはそれらと方位を異にする。水田面に足跡の集中する部分がある。第３トレンチ南壁の観察でも水田面の踏み込みが顕著な部分とほとんどない部分とがある（図11・13）。第１トレンチ東半や第２トレンチ西半でも踏み歩きの足跡が確認できた。第１トレンチのもの（図12・38）は不整形のものばかりだが、第２トレンチのものは形状がよく残り、牛馬ともに確認できる（図37）。

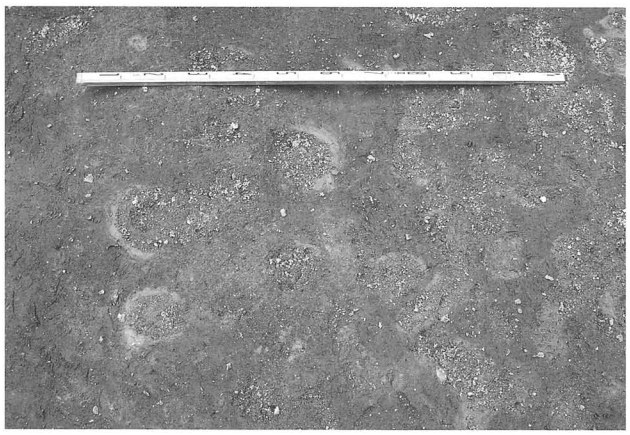


図37　第２トレンチ第２遺構面蹄跡（北から）

図38　第１トレンチ第２遺構面足跡（西から）

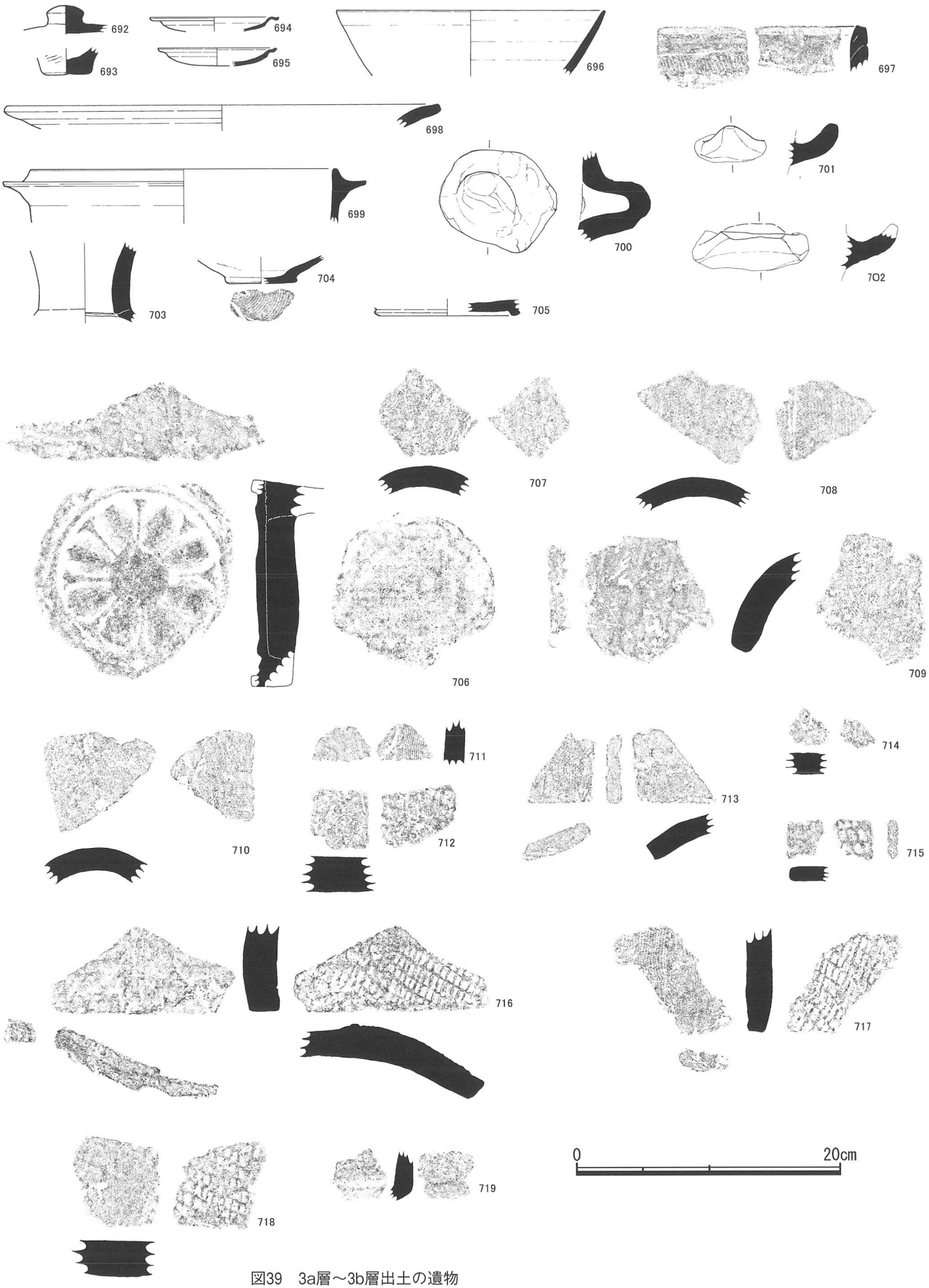


図39　3a層～3b層出土の遺物

（692・694・695・697～702：土師器、693：弥生土器、696・703～705：須恵器、706～719：瓦）

図40　第３トレンチ洪水砂3c層軒丸瓦706出土状況（北西から）

水田面を覆う洪水砂からは、土器類のほか奈良時代と推測される瓦が出土した。その中には素弁の軒丸瓦があり（図39-706・図40・図版９-706）注目される。緑釉陶器は出土していない。調査区西端の段付近の耕土4a層には礫・松明・木切れ・土器などが多く含まれる部分がある（SX01、図版10-26）が、ここから出土する土器には飛鳥時代頃のものが確認できる（図41）。飛鳥時代から奈良時代頃の水田と考えられる。

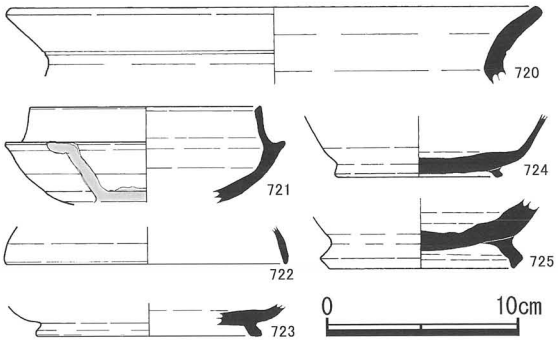


図41　SX01出土の遺物
（720：土師器、720～725：須恵器）アミは自然釉

第３遺構面およびその下層　　第２遺構面の水田耕土である4a層の下層には洪水砂である４b層が堆積する。

4b層の下面、土壌化が著しい5a層上面でこの洪水砂に覆われる溝SD02・SD05などが検出された。SD05の東岸では杭で留められた板材が出土し（図版10-22）、SD05の①層下面（図13・図版10-22）からは直柄横鍬の泥除が出土している。この泥除けは46cm×16cmを測り、上辺の２ケ所に小孔が開けられ、樺で綴じられている。柄を通す円孔の直径は３cm弱。

5a層中では第１次調査と同様、木道あるいは足場とするためのものか、並べられた板材や、板や丸太材を並べ杭で留められるものなどが確認されている（図44、図版10-23～25）。この層からの出土土器は少ないが、古墳時代末頃の須恵器蓋杯杯身の小片等が確認されている。

土留めあるいは木道の設置等、湿地を開発した痕跡が認められること、また溝内から農具が出土していることから、5a層は水田として開発されている可能性が高いと考えられる。

5a層の下層も、湿潤な環境下で形成され土壌化の進んだ黒い粘土層が厚く堆積するが、その間に挟まれるように複数枚の薄い砂質粘土層が存在する。湿潤な環境下で土層の形成がなされる間、間隔を置いて大雨等で砂を多く含む土が複数回堆積したものと推察される。

この層群上位、5a層と6a層の間にある薄い砂質粘土層は、一部がわずかに凹み、幅1.2m・深さ10cmほどの水みちとなっている部分（SD06）が確認された。

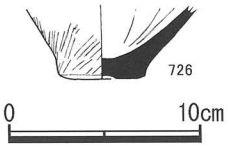


図42　SD02出土の遺物（726：弥生土器）

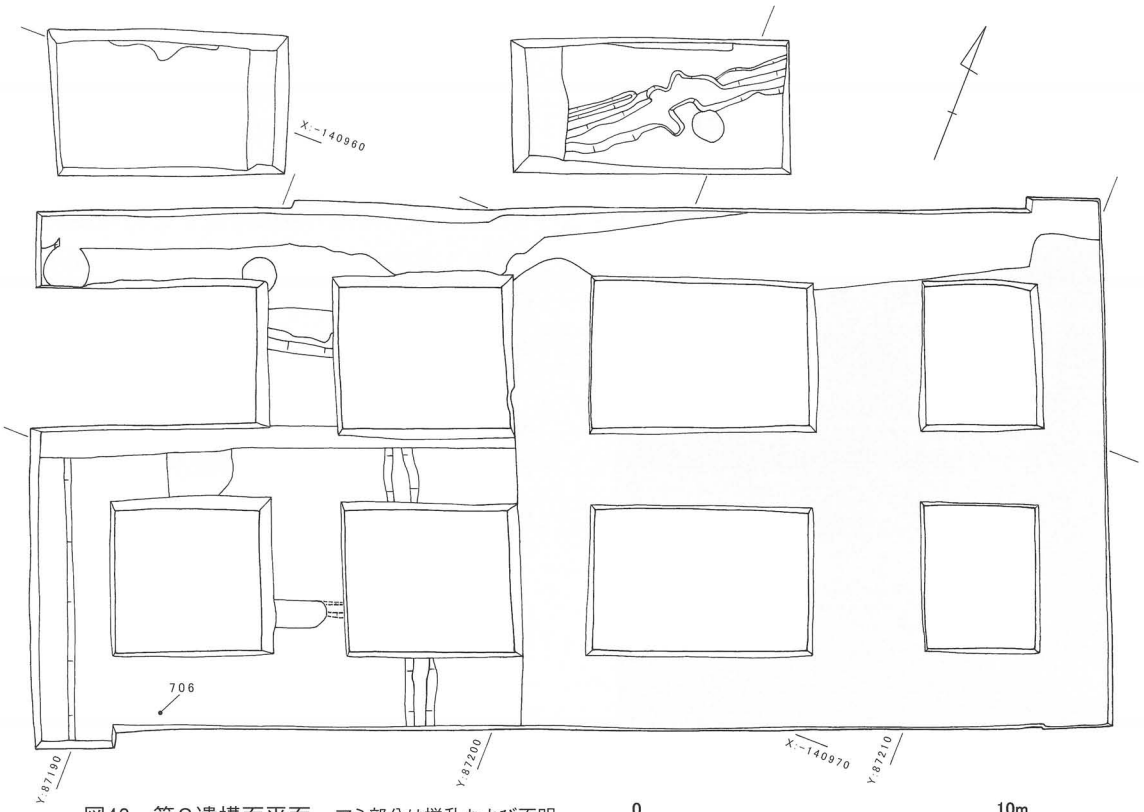


図43　第2遺構面平面　アミ部分は撹乱および不明

0　10m

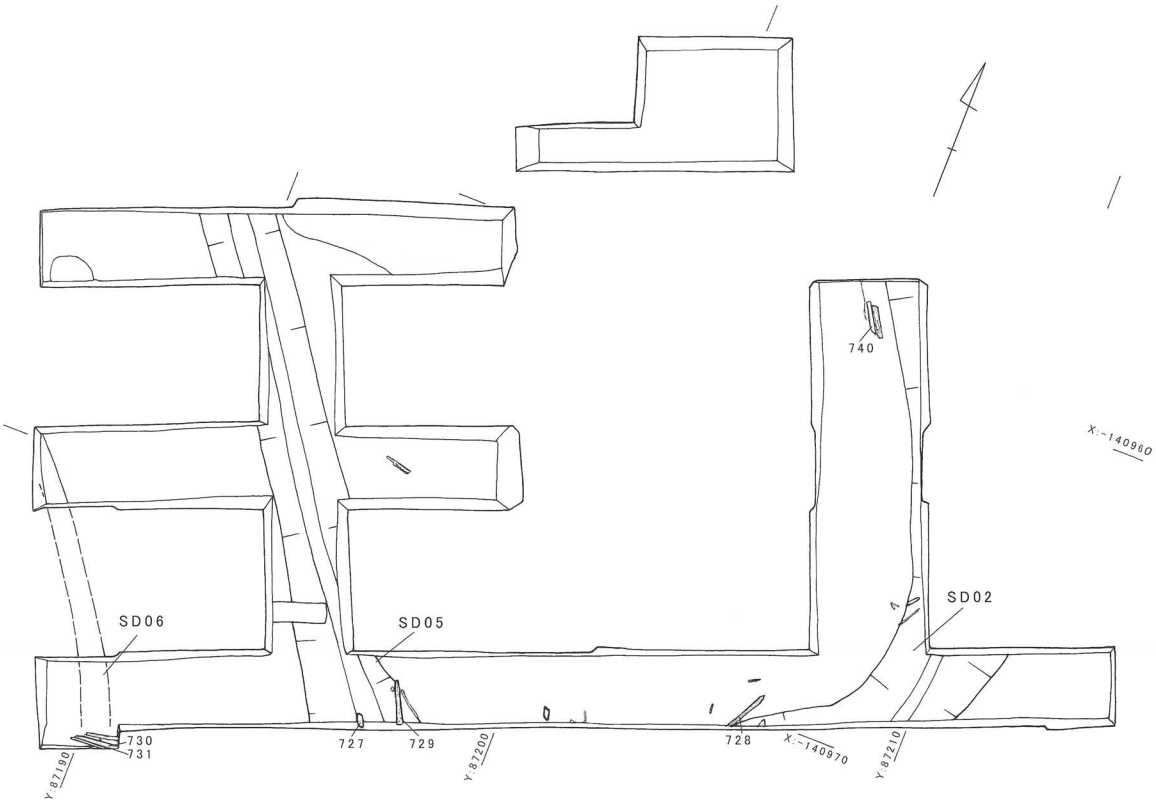


図44　第3遺構面平面　アミ部分は撹乱

0　10m

木質遺物

今回の調査では、SD02より２点、SE01より10点以上、SK01より１点、SK02より１点、SD05より７点、SX01より10点の出土があり、これに加えて第３遺構面に対応する表土層である4a層中より40点以上が出土した。

これらはほとんどが丸材および割り材、板材の部類である。ここでは4a層から出土した建築・土木材５点および古墳時代後期と推定されるSD05出土の１点、そして平安時代の遺構（SE01、SK01、SK02）より出土した主要な遺物６点について図示する。

なお井戸および井戸状遺構構築材各材の樹種については第Ⅲ章に掲載しているので参照されたい。

728・730～733は4a層、また729はSD05出土の建築部材と考えられる。728～731は２ｍを超える大型の部材で、729～731には端部に直径の半分を抉り込む仕口が施される。

734・739はSE01を構成する部材である。734は長径約71.0cmの楕円を呈する曲物で高さは15.8cmを測る。側板は内面にケガキを施したヒノキの板目板を曲げて製作しており、下部に帯板を巻いて補強している。綴じは樺皮を用いた「１列外５段綴じ」である。739は直径60cm近くを測るクスノキの丸太を刳り貫いて製作された井筒で、残存高は48cm、身の厚さは最大約４cmを測る。表面劣化のため加工痕は不明瞭で、製作の状況は定かでない。

737は残存する長径48.4cmを測る、曲物の底板もしくは蓋板と考えられる。厚さ約６mmの半円形を呈するが、本来は円形ないしは楕円形であったと考えられる。

738は737同様、曲物の部材と考えられ、側面に木釘孔と思しき孔が残存することから、底板の可能性が高い。残存する長径44.6cm、厚さ1.0cmを測る。

735はSK01出土の曲物であり、枠として使用されていた。直径41.5cm、高さ18.0cm以上を測る。綴じは「２列前外２段以上後内２段以上綴じ」であるが、上半を欠損するため段数は不明である。また、下半を幅3.5cmの帯板で補強している。

736はSK02出土の曲物である。損傷が大きいため、詳細は不明であるが、復元される直径は約46.5cm、高さ6.0cm以上を測る。綴じは「１列外３段以上綴じ」で、内面にはケガキが施されている。また、下半を幅3.2cmの帯板で補強している。

※曲物の綴じについては、奈良国立文化財研究所「８容器Ｃ円形曲物」『木器集成図録　近畿古代編』奈良国立文化財研究所　史料第27冊　1985　を参考にした。

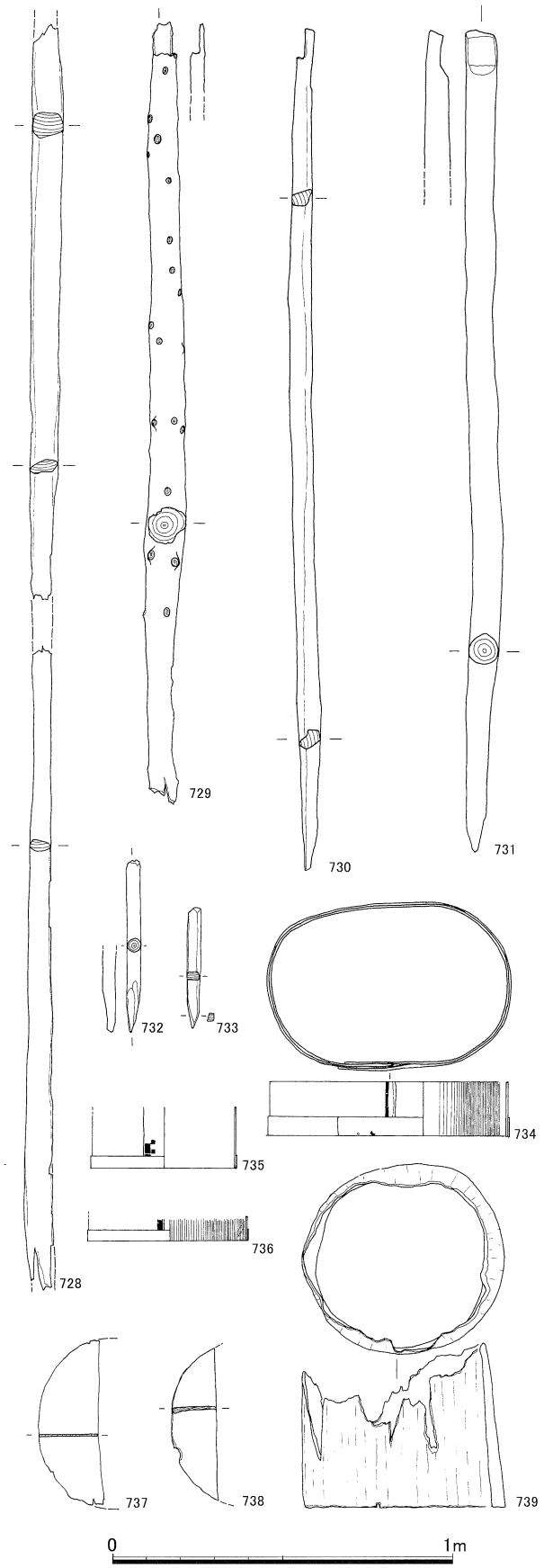


図45　木質遺物　728～733:4a層、734・737～739:SE01、735:SK01、736:SK02出土

Ⅲ．自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社
高橋　　敦
松元　美由紀

1．木製品の樹種

(1) 資料

今回の調査で出土した木質遺物のうち、８点について樹種同定調査を実施した。調査結果の概要について以下に記す。

(2) 結果

樹種同定結果を表１に示す。木製品は、針葉樹２分類群（スギ・ヒノキ）と広葉樹１分類群（クスノキ）に同定された。

(3) 考察

貯水施設と考えられる井戸状の遺構SE01および土坑SK01・02の底に据えられた曲物の底板２点（W-1，2）、側板４点（W-3～6）の計６点について調査を行った結果、全てが針葉樹のヒノキに同定された。ヒノキは、木理が通直で割裂性が高く、薄板状の加工が容易で耐水性が高い材質を有する。曲物に多用された背景には、ヒノキの加工性や耐水性等の材質が考えられる。

一方、SE01底の曲物の上に据えられる刳り貫き式の井筒は常緑広葉樹のクスノキ、さらにその上位に井戸枠として組まれる板材が針葉樹のスギに同定された。共に大径木になる樹種であるが、スギは木理が通直で割裂性が高く、加工が容易である。一方、クスノキは、交錯木理を有しており、加工は困難な部類に入るが、保存性・耐水性は比較的高い。

本遺跡周辺では、深江北町遺跡において、奈良～平安とされる容器としての曲物がヒノキあるいはヒノキ属に同定されている（松葉，2002）。また、本遺跡からはやや距離が離れるが、御蔵遺跡（長田区）の９世紀前半とされる曲物でも全点がヒノキに同定されている（パリノ・サーヴェイ，2001）。これらの結果から、曲物は用途に関わらずヒノキが利用されていたことが推定される。井筒は、二葉町遺跡（長田区）において、９世紀の刳り貫き資料に複維管束亜属が確認された例があるが（松葉，2001）、スギやクスノキの利用例は報告されていない。摂津地域の平安時代における井戸部材では、御蔵遺跡の９世紀とされる井戸枠にコウヤマキ、10世紀とされる井戸枠にクスノキが確認された例がある（パリノ・サーヴェイ，2001）。また、上沢遺跡（長田区・兵庫区）では、奈良時代とされる井戸側（横板）が全てスギに同定されている（神戸市教育委

表１．樹種同定結果

番号	実測図番号	遺構	遺物名	時期	樹種
W-1	—	SE01	曲物底板	平安時代初頭	ヒノキ
W-2	736	SE01	曲物底板	平安時代初頭	ヒノキ
W-3	737	SE01	曲物側板	平安時代初頭	ヒノキ
W-4	734	SE01	曲物側板	平安時代初頭	ヒノキ
W-5	738	SK01	曲物側板	平安時代初頭	ヒノキ
W-6	739	SK02	曲物側板	平安時代中期	ヒノキ
W-7	—	SE01	井筒	平安時代初頭	スギ
W-8	735	SE01	井筒	平安時代初頭	クスノキ

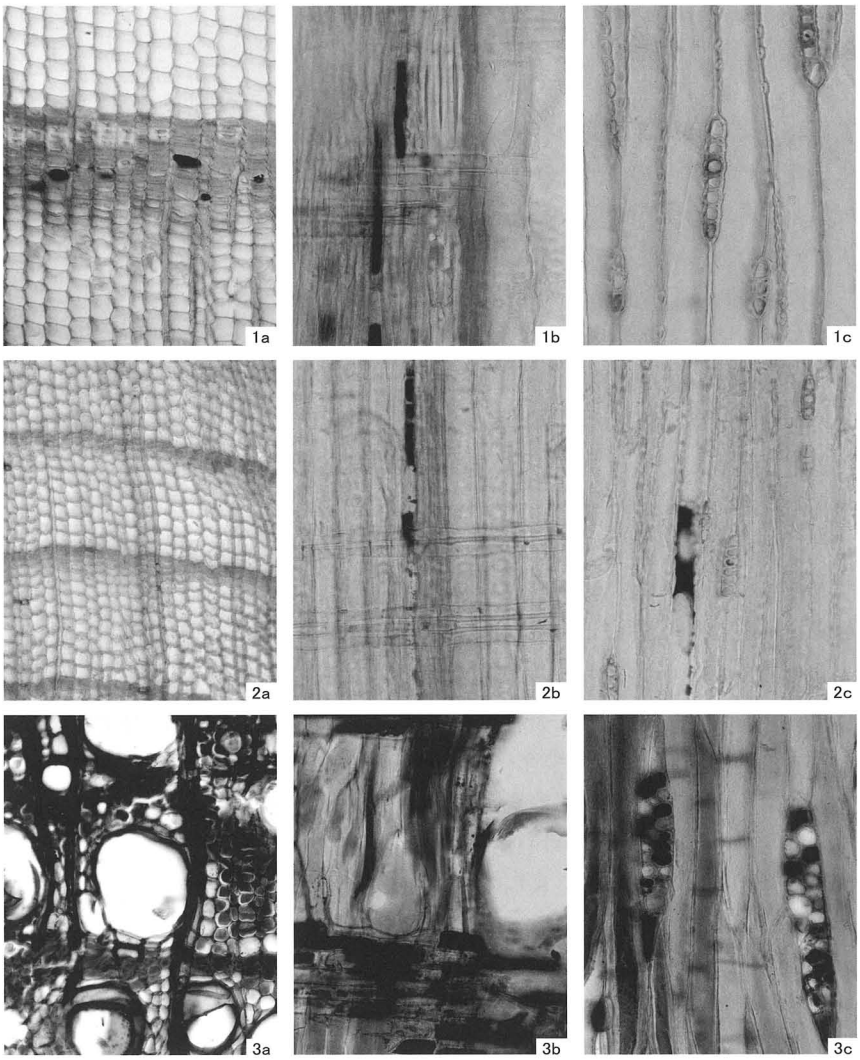


図46　木材組織顕微鏡写真

1. スギ(W-7)
2. ヒノキ(W-3)
3. クスノキ(W-8)
a:木口，b:柾目，c:板目

200μm:a
100μm:b,c

員会，2002)。井戸側等の材としてクスノキが利用される事例はあるが、井筒としての利用例はこれまで確認されていななかった。本例により、井筒としても利用されていることを確認できた。

2．種実遺体の種類

(1) 試料

試料は、SE01底の石敷き部分から出土した種実２点（R-133、134-2）である。各試料には、複数の分類群の種実が約100個確認される。

(2) 結果

結果を表２に示す。木本10分類群（広葉樹のムクノキ・クワ属・クスノキ科・モモ・アカメガシワ・サンショウ属・センダン・ブドウ属・ノブドウ・ブドウ科）161個、草本19分類群（イバラモ属・オモダカ科・イネ・イネ科・ホタルイ属・カヤツリグサ科・ミズアオイ属・イヌタデ近似種・ヒユ科・タガラシ・キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属・エノキグサ・チドメグサ属・イヌコウジュ属・ナス科・ヒョウタン類・メロン類・ゴキヅル？・スズメウリ）55個、不明２個、計218個の種実が検出されたほか、広葉樹の葉の破片２個・木材・炭化材・木の芽が確認された。各試料の種類組成は、134-2でムクノキが多い程度で大差は認められない。栽培種は、モモ３個・イネ穎９個・イネ穎胚乳と思われる破片１個・ヒョウタン類１個・メロン類１個と、栽培種の可能性が高いナス科３個が確認され、イネ穎２個と胚乳（？）１個は炭化している。

(3) 考察

井戸埋土下部より産出したモモ・イネ・ヒョウタン類・メロン類は、古くより大陸より渡来した栽培種とされる。モモは、観賞用の他、果実が食用、薬用、祭祀等に広く利用される。植物質食糧のイネは、一部炭化していることから火を受けたことが推定される。ヒョウタン類は果実が食用や容器に、メロン類は果実が食用に利用される。また、今回検出されたナス科は、種子が大型であることから栽培種の可能性が高い。ナス科には、野生品の採取、在来種の栽培、渡来種の栽培など、種実や種実以外の部位の利用形態が考えられる（青葉，1991など）ことから、種類の細分化ができれば詳細な検討が可能となり、今後の課題である。これらの栽培種（可能性が高いナス科を含む）の可食部である種実が、平安時代初めの水溜め遺構内より出土したことから、当該期の本遺跡周辺域における利用と、遺構内への廃棄等の人為的行為が推

表２．種実同定結果

分類群	部位	状態	上段：遺構名(時期)・試料名 SE01(平安時代初め) R-133	134-2	備考
木本					
ムクノキ	核	完形	4	24	
		破片	9	24	
		破片 未熟個体?		19	5個基部確認
クワ属	種子	完形	2		
クスノキ科	種子	完形		1	
		破片	6	10	
モモ	核	破片	2 (長さ14.50㎜，幅8.93㎜／長さ12.77㎜，幅11.41㎜)	1 (長さ21.87㎜，幅18.80㎜)	栽培種
アカメガシワ	種子	完形	1		
		破片	1		
サンショウ属	核	完形	16	8	
		破片	1	3	
センダン	核	完形		1	
		破片	1		
ブドウ属	種子	完形		12	
		破片	1	1	
ノブドウ	種子	完形	4		
		破片	1	1	
ブドウ科	種子	破片	1	6	
広葉樹	葉	破片	2		
木材(径2㎜以上)			+	+	
炭化材(径2㎜以上)			+	+	
木の芽			+		
草本					
イバラモ属	種子	完形		1	
オモダカ科	種子	完形	1	1	
イネ	穎	破片	5	2	栽培種
		破片 炭化	1	1	
	胚乳?	破片 炭化		1	
イネ科	果実	完形	1		
ホタルイ属	果実	破片		3	
カヤツリグサ科	果実	完形	2	2	
		破片	2	1	
ミズアオイ属	種子	完形		1	
イヌタデ近似種	果実	完形	1		
ヒユ科	種子	完形	1		
タガラシ	果実	完形	1	1	
		破片		1	
キジムシロ類*	核	完形		1	
		破片	3		
エノキグサ	種子	破片	2		
チドメグサ属	果実	完形		1	
		破片	1	2	
イヌコウジュ属	果実	破片	2	2	
ナス科	種子	完形	3		栽培種(?)
ヒョウタン類	種子	完形	1		栽培種
メロン類	種子	破片	1		栽培種
ゴキヅル?	種子	破片	2		
スズメウリ	種子	完形		2	
		破片		1	
タカサブロウ	果実	完形	1		
不明種実			1	1	
昆虫			+	+	

注）*キジムシロ類：キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属
注）試料中に確認される木材・炭化材・木の芽・昆虫は、抽出・プラス表示にとどめる

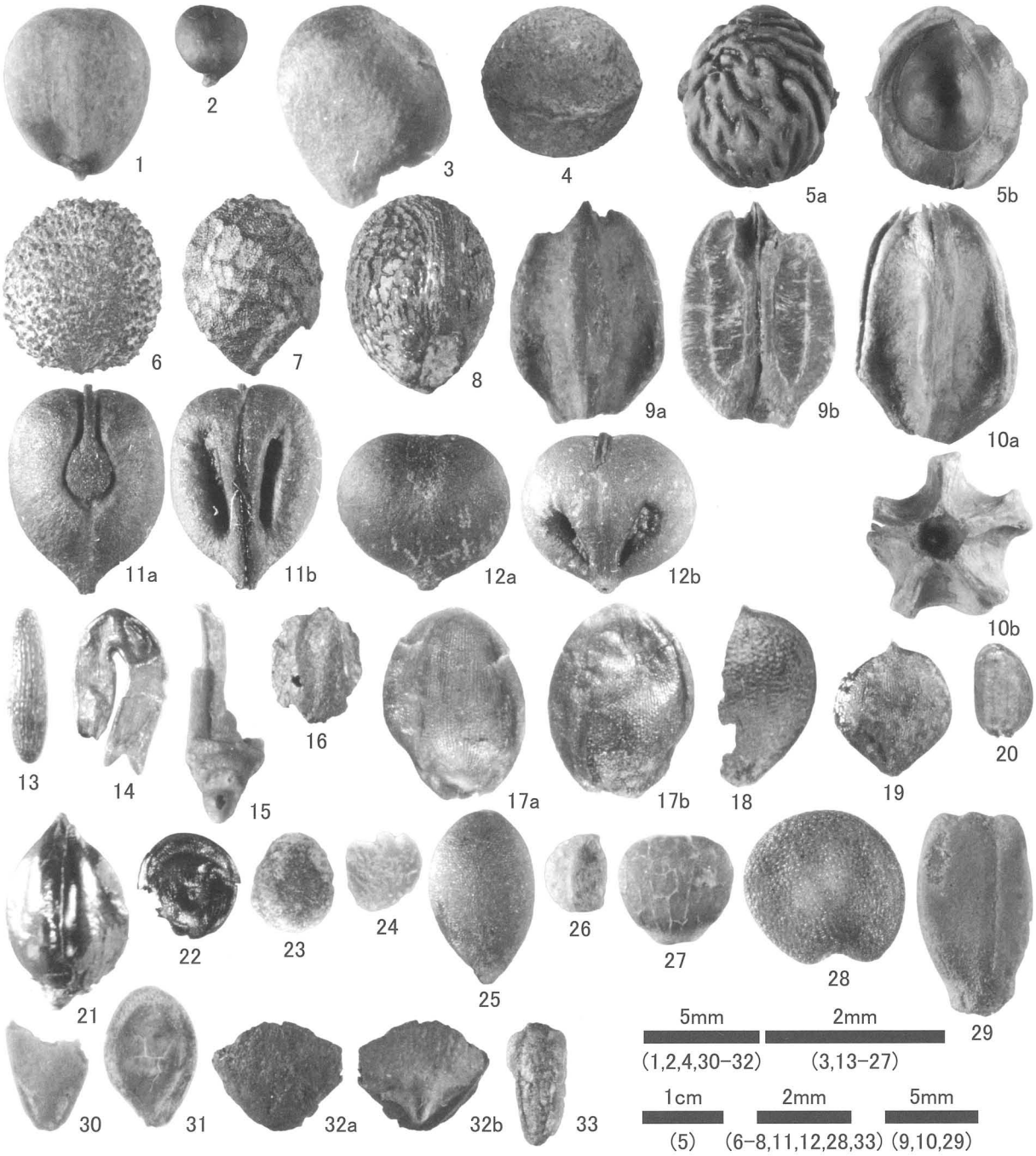


図47　SE01出土の種実遺体

1．ムクノキ 核(134-2)
2．ムクノキ 未熟個体?(134-2)
3．クワ属 種子(R-133 3次)
4．クスノキ科 種子(134-2)
5．モモ 核(134-2)
6．アカメガシワ 種子(R-133 3次)
7．サンショウ属 核(R-133 3次)
8．サンショウ属 核(R-133 3次)
9．センダン 核(R-133 3次)
10．センダン 核(134-2)
11．ブドウ属 種子(134-2)
12．ノブドウ 種子(R-133 3次)
13．イバラモ属 種子(134-2)
14．オモダカ科 種子(134-2)
15．イネ 穎(R-133 3次)
16．イネ 胚乳?(134-2)
17．イネ科 果実(R-133 3次)
18．ホタルイ属 果実(134-2)
19．カヤツリグサ科 果実(134-2)
20．ミズアオイ属 種子(134-2)
21．イヌタデ近似種 果実(R-133 3次)
22．ヒユ科 種子(R-133 3次)
23．タガラシ 果実(R-133 3次)
24．キジムシロ属ーヘビイチゴ属ーオランダイチゴ属 核(R-133 3次)
25．エノキグサ 種子(R-133 3次)
26．チドメグサ属 果実(134-2)
27．イヌコウジュ属 果実(R-133 3次)
28．ナス科 種子(R-133 3次)
29．ヒョウタン類 種子(R-133 3次)
30．メロン類 種子(R-133 3次)
31．スズメウリ 種子(134-2)
32．ゴキヅル? 種子(R-133 3次)
33．タカサブロウ 果実(R-133 3次)

定される。

栽培種を除いた分類群は、木本は全て広葉樹で、河畔林要素のムクノキをはじめ、クワ属・クスノキ科・アカメガシワ・サンショウ属・センダンなどの高木になる樹種や、ブドウ属・ノブドウ・ブドウ科などの籐本類が確認された。これらの樹種は、遺跡周辺域の河畔林やその林縁部に生育していたものに由来すると思われる。

草本は、明るく開けた場所を好んで生育する、いわゆる人里植物に属する分類群が確認された。沈水植物のイバラモ属、抽水植物のミズアオイ属、抽水～湿生植物のオモダカ科・ホタルイ属や、湿生植物のタガラシ・ゴキヅル？・スズメウリを含むことから、周辺域に水湿地の存在が推定され、栽培種のイネの供伴より水田雑草として生育していたものに由来する可能性もある。

なお、ムクノキ・クワ属・ブドウ属は、果実が生食可能である。サンショウ属には種実が香辛料や薬用に利用可能な種（サンショウ）を含む。これらの種実は、上述の栽培種とともに利用されていた可能性はあるが、今回検出された種実遺体には、人間による確実な利用の痕跡は認められない。

本遺跡周辺の平安時代の古植生情報は、本遺跡の既往の調査区の花粉分析結果（古環境研究所, 1995）および深江北町遺跡の花粉分析結果（新山, 2002）が存在する。両地点の分析結果は概ね類似し、平安時代頃には二次林の代表的な樹種であるマツ属複維管束亜属やコナラ亜属花粉が増加傾向を示すようになり、それまで多産していたアカガシ亜属・シイノキ属などの照葉樹林要素が減少傾向を示すようになる。また、イネ科を中心とする草本花粉も多産している。これらのことから、平安時代頃の周辺植生は基本的にはアカガシ亜属などの常緑広葉樹林であったが、人為的植生撹乱の影響によりマツ属などの二次林が拡大していく時期であったと推定される。また、イネ科などの草本花粉の多産傾向は調査地域周辺での耕作地開発を示唆するものである。今回の井戸埋土の種実組成は、このような花粉分析結果から推定される古植生とも同調的な産状といえる。

引用文献

青葉　高，1991，野菜の日本史．八坂書房，317p.

林　昭三，1991，日本産木材　顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所.

石川　茂雄，1994，原色日本植物種子写真図鑑．石川茂雄図鑑刊行委員会，328p.

伊東　隆夫，1995，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料，31，京都大学木質科学研究所，81-181.

伊東　隆夫，1996，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料，32，京都大学木質科学研究所．66-176.

伊東　隆夫，1997，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料，33，京都大学木質科学研究所，83-201.

伊東　隆夫，1998，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料，34，京都大学木質科学研究所，30-166.

伊東　隆夫，1999，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料，35，京都大学木質科学研究所，47-216.

古環境研究所，1995,「Ⅴ　自然科学分析」、浅岡俊夫・古川久雄・梅川光隆編「神戸市東灘区本山中野遺跡―道路状遺構の調査―、六甲南麓遺跡調査会，　p.66-78.

神戸市教育委員会，2002，上沢遺跡第33次調査.「平成11年度神戸市埋蔵文化財年報」，神戸市教育委員会，291-299.

松葉　礼子，2001，二葉町遺跡出土木製品の樹種同定.「二葉町遺跡発掘調査報告書　第３・５・７・８・９・12次調査」，神戸市教育委員会，141-166.

松葉　礼子，2002，出土した木製品の樹種同定.「深江北町遺跡第９次埋蔵文化財発掘調査報告書」，神戸市教育委員会，107-134.

中山　至大・井之口　希秀・南谷　忠志，2000，日本植物種子図鑑．東北大学出版会，642p.

新山　雅広，2002，深江北町遺跡（第９次調査）の花粉化石群集.「深江北町遺跡第９次埋蔵文化財発掘調査報告書」，神戸市教育委員会，135-140.

パリノ・サーヴェイ株式会社，2001，御蔵遺跡から出土した木製品等の樹種.「御蔵遺跡　第４・６・14・32次発掘調査報告書」，神戸市教育委員会，114-122.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編），2006，針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東　隆夫・藤井　智之・佐野　雄三・安部　久・内海　泰弘（日本語版監修），海青社，70p.［Richter H.G., Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（2004）*IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*］.

島地　謙・伊東　隆夫，1982，図説木材組織．地球社，176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編），1998，広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東隆夫・藤井　智之・佐伯　浩（日本語版監修），海青社，122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］

Ⅳ．まとめ

今回の調査では古墳時代後期あるいは飛鳥時代から平安時代にかけての遺構面３面が確認でき、本山中野遺跡の変遷についてより詳しく明らかにすることができた。

第２次調査で得られたデータにより、付近に高級食器を使う階層の住まい、また、瓦葺建物の存在が予想されたが、今回の調査区においてその一部が確認されたことになる。

ただし第１遺構面で確認された高級食器を使う階層が使用した建物SB01は火災にあっており、このためか第１遺構面に対応する表土層に多量の遺物が残されていたのにもかかわらず、この層およびこれを覆う洪水砂層から瓦は出土しなかった。一方、遺物の出土量が少なかったため確定的ではないが、第２遺構面を覆う洪水砂からは緑釉陶器・灰釉陶器の出土は確認されなかった。このことからすると、今回確認された緑釉陶器・灰釉陶器をもつ掘立柱建物群と瓦とは時期を異にする別個のものである可能性が高いということになる。

第１遺構面では柱間約2.1mすなわち７尺１間の掘立柱建物、また同2.2mとさらに柱間の広い建物が営まれていることを確認できた。SB01とSB03は設計軸が共通で、同時に存在した可能性も考えられる。山陽道に近いこともあり、官衙的な施設であればその建物は瓦葺きである可能性がより高いのではないかと思われるが、この遺構面に対応する表土層からの瓦の出土はない。これらの建物が瓦葺でないことは確実で、SB01・SB03は個人の邸宅の一部である可能性が高いのではないかと推測される。第１遺構面に対応する土層からの出土遺物は九世紀から十世紀代のものが大多数を占めるが、柱穴出土遺物からSB01の焼失は十世紀前半と思われる。

八世紀末から九世紀初めと考えられるSE01底面石敷きからの出土土器には「南」・「木工」などの墨書が確認できることからすれば、この屋敷あるいは施設には「南」に対する「北」の施設が少なくとも存在し、「木工」を行う施設、あるいはこれを職掌とする工人グループの存在を伺うことができるわけで、この屋敷は、工人グループを抱えるような施設的にもかなり規模の大きいものと推察される。磁器・緑釉陶器等などの持ち物からも、その主人について当地を統率する階層に属するものと推測してあやまたないだろう。

SB01の焼失した十世紀という時代は芦屋駅に比定されている須岐駅あるいは藁屋駅家付近での戦闘（天慶二［939］年）を発端とする藤原純友乱が起きたことが知られ、平安時代初めころには存在していたこの屋敷の住人は、備前介藤原子高・播磨介島田惟幹主従と純友士卒との戦いを目撃した可能性がある。

飛鳥時代以降奈良時代と考えられる第２遺構面の段階、当地は水田の広がる耕作地であったが、水田を覆う洪水砂中に存在する瓦から、今回の調査地の山手側にあたる北に瓦葺建物の存在したことが推測できる。ただし、この周辺において瓦葺建物をもつ施設の存在は、これまでに文献史料の上でも考古学的にも知られていない。

ここで当地の字名に目を向けると、調査地の北300mに「寺垣内」・「地蔵跡」・「東光寺跡」・「道西」・「道東」があり（図４）、注目される。「地蔵跡」と現在要玄寺の所在する「東光寺跡」は要玄寺川の西岸にあたり、現在法覚寺が所在する「道西」、そして「道東」は東岸にあたる。「道西」・「道東」両字の間には当然山陽道に直交する「道」があっただろうが、地図を見る限り、とりたて字名に使われるほど立派なものがあるとも思えない。「道」は「堂」に音が通じ、これが転化したものである可能性も考えられる。

本山中野遺跡で出土した瓦の供給源を推定する手がかりになりそうなのは今のところこの字名しかない。ただ、要玄寺川を挟んで西に隣接する本山遺跡におけるこれまでの調査では瓦の目立った出土は確認されていないことからすると、その供給源は要玄寺川の東にある可能性が高いといえるかもしれない。無論「寺垣内」・「地蔵跡」・「東光寺跡」地区も含め、瓦葺き建物が存在した可能性の考えられる「道西」・「道東」について、今後、考古学的手法により検証されることが期待される。

２次・３次調査で出土した瓦は奈良時代頃のものがほとんどだが、第２次調査地点からは、図９-144のように堅緻な焼き上がりで平安時代後期と推定されるものも交じる。この資料は出土層位が明確でないが、これらの瓦が同じ施設で使用されたものであれば、この施設は自然災害を受けながらも再興され、長期にわたり存続した可能性も考えられる。

第３遺構面以下は黒色の粘土が厚く堆積し、長い間湿地状の状態であったことを確認できた。この遺構面においては、湿地を歩くための木道あるいは土留めと考えられる丸太や板材が複数確認され、また、溝から農具が出土しており、遅くとも古墳時代後期から飛鳥時代にはここで湿田が営まれるまでに陸化が進行していたものと考えられよう。

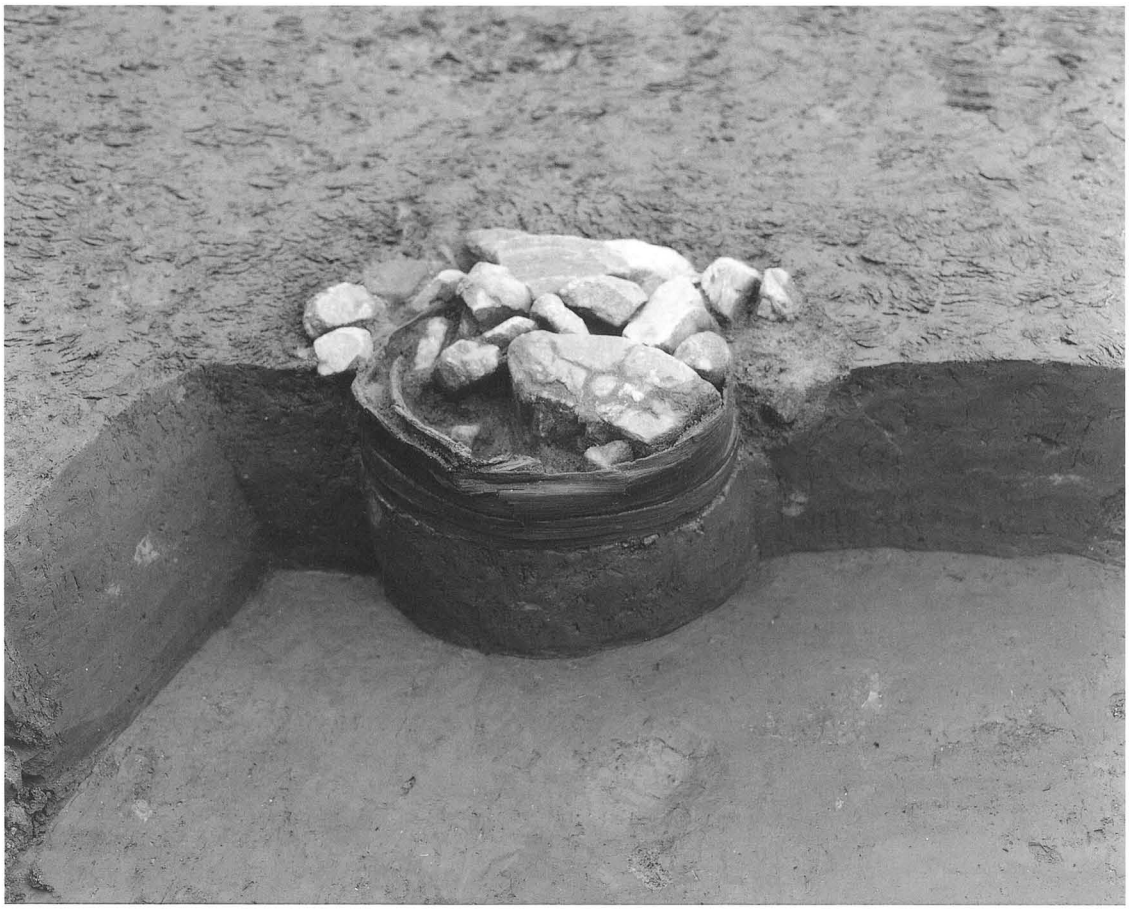
図版１　第１遺構面南東部・SX03

1. 第１遺構面南東部（北から）

2. SX03（北西から）

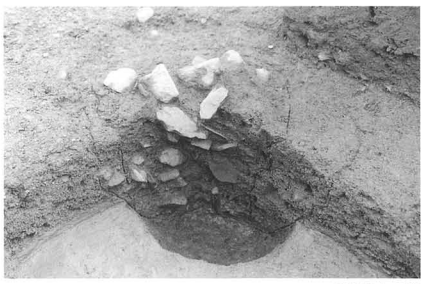
図版２　第１遺構面SK01・SK02

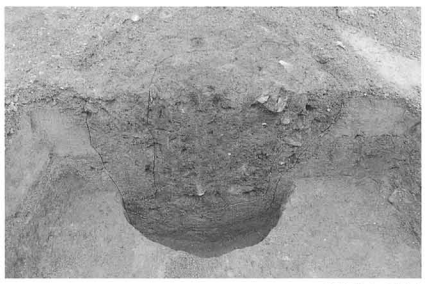
３．SK01（西から）



４．SK02（北東から）

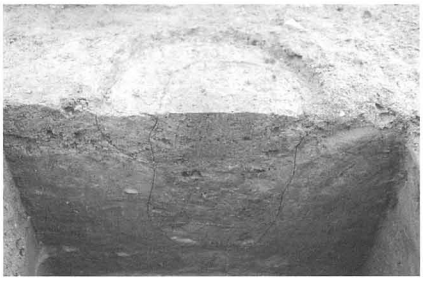
図版３　第１遺構面柱穴土層断面


SB01-P1


SB01-P14

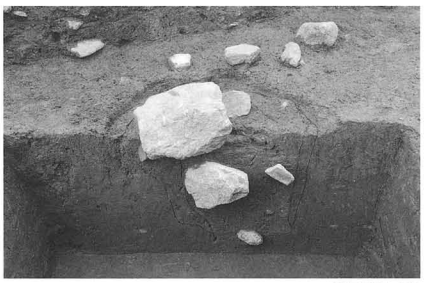
SB01-P7

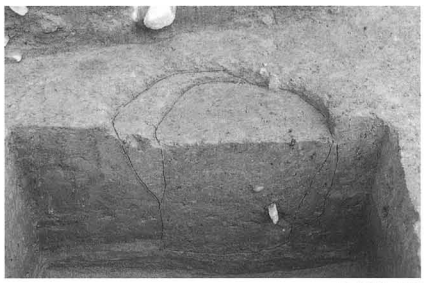
SB01-P16


SB01-P17

SB01-P18

SB01-P21

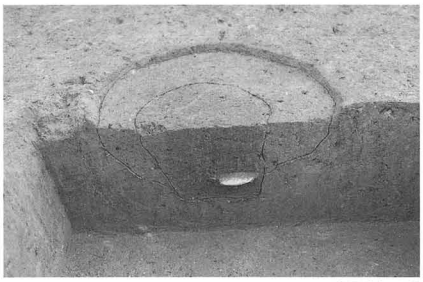

SB02-P2


SB02-P3

SB02-P7

SB03-P1

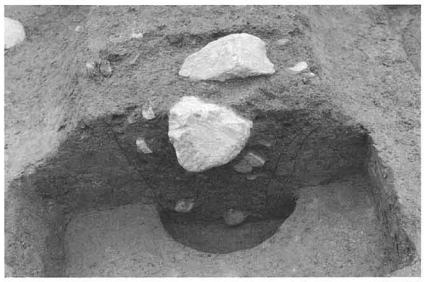
SB03-P4


SB03-P8

SB04-1P

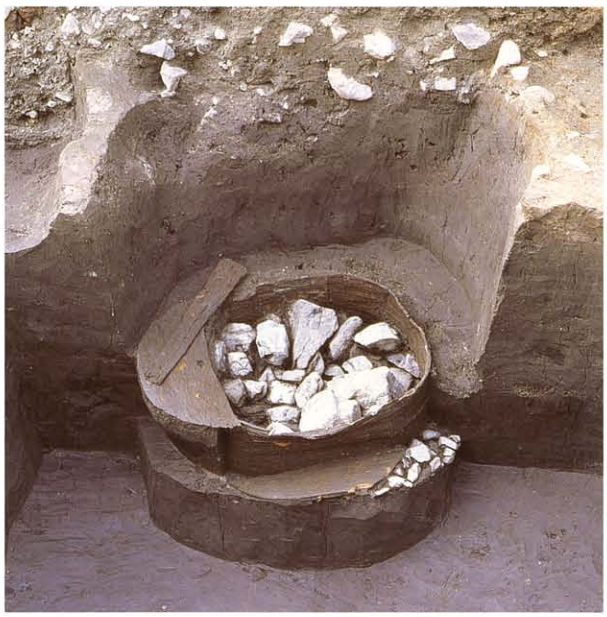
SB04-P4

SP40


SP45

SP49・SP51

図版４　SE01



6．SE01

図版５　SE01出土遺物

601

600

603

602

600

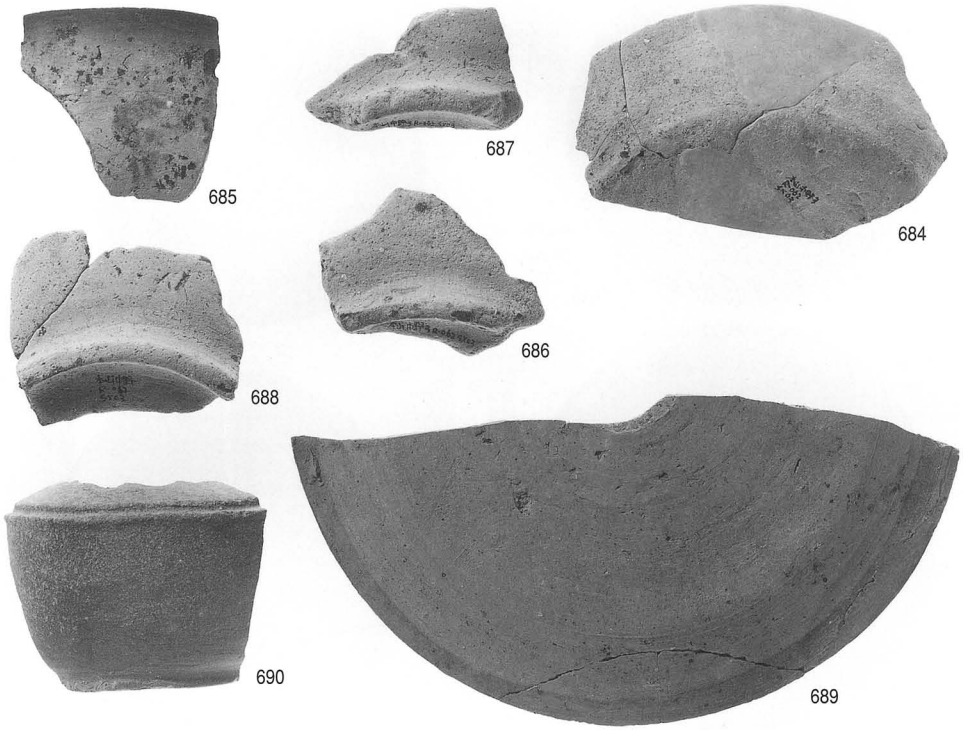
601

602

603

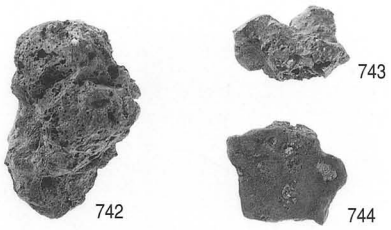
墨書の赤外線反射像

図版６　第２遺構面出土の遺物[1]・スラグ



8. SX03出土の遺物〔1〕

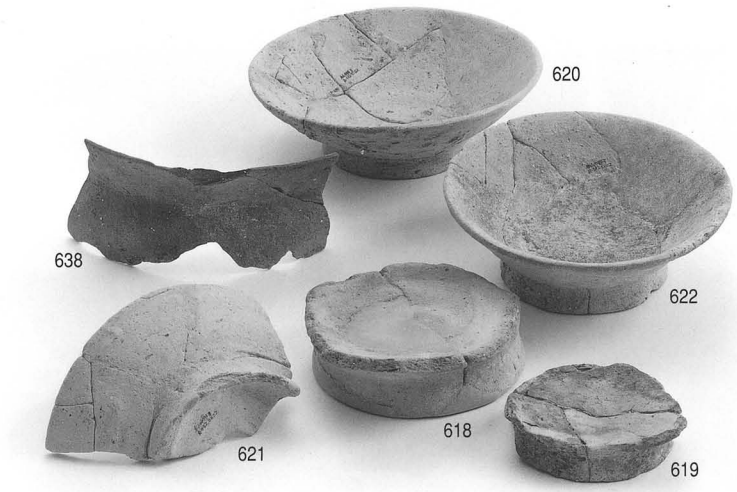
9. SX03出土の遺物〔2〕



10. スラグ(742：SP46、743・744：2b層出土)

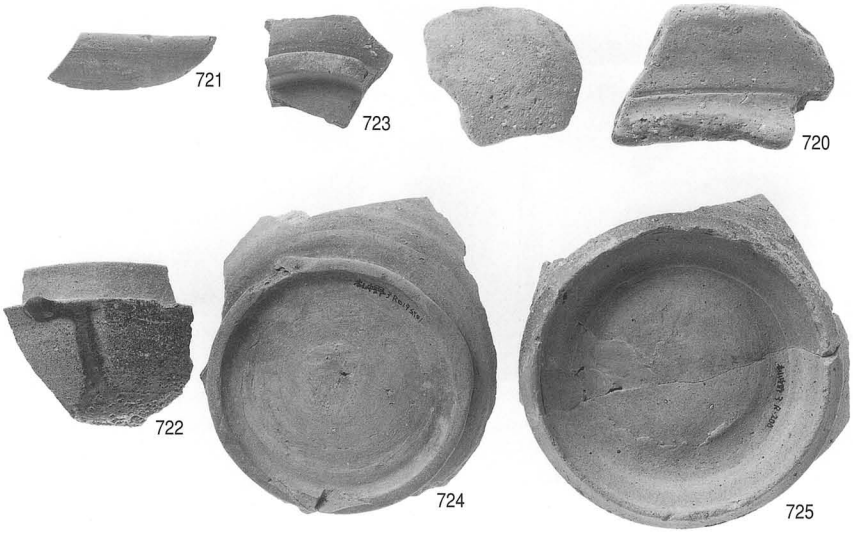
11. SX03出土の遺物〔3〕

図版７　第２遺構面[2]・第３遺構面出土遺物



12. SX02出土の遺物

13. 柱穴出土の遺物

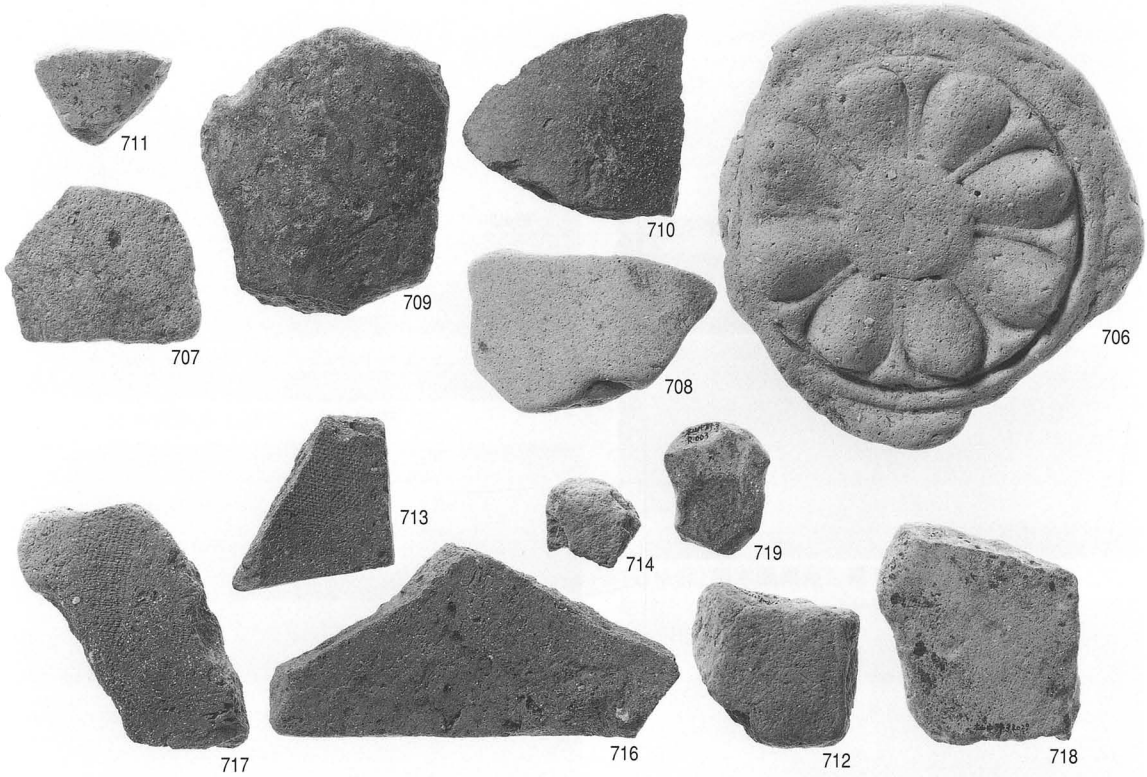


14. SX01出土の遺物

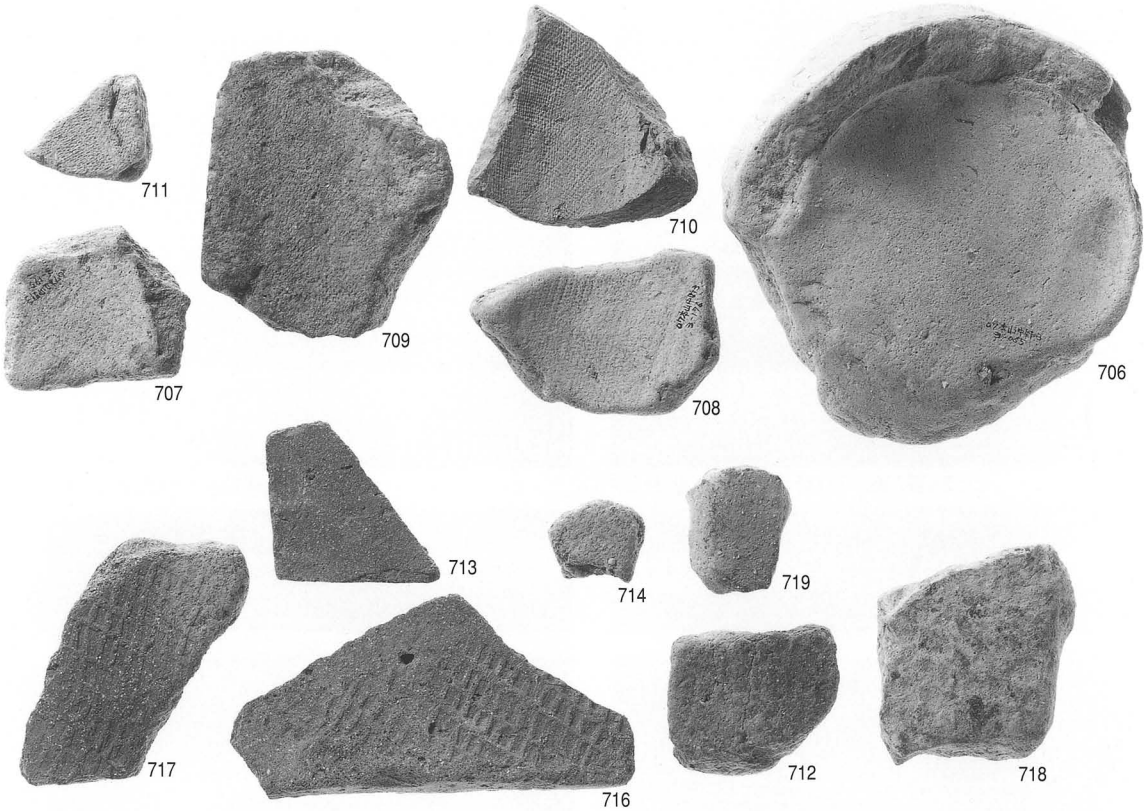
図版８　緑釉陶器・灰釉陶器・磁器

15. 緑釉陶器

16. 青磁・白磁・灰釉陶器



17. 第２遺構面を覆う洪水砂3c層出土の瓦（表）



18. 第２遺構面を覆う洪水砂3c層出土の瓦（裏）

図版10　第２遺構面・第３遺構面

19. 第４トレンチ第２遺構面水田（北から）

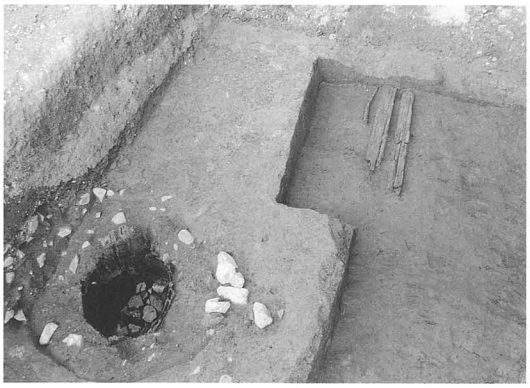
20. 第10トレンチ第２遺構面水田（西から）

21. SD05（北西から）

22. SD05護岸材729・横鍬泥除け727出土状況（北から）

23. 5a層730・731等出土状況（北から）

24. 5a層728出土状況（北東から）



25. 5a層740出土状況（南東から）

26. 第９トレンチSX01（北東から）

報 告 書 抄 録

ふりがな	もとやまなかのいせきだいさんじはっくつちょうさほうこく
書　　名	本山中野遺跡第三次発掘調査報告
副 書 名	
編著者名	須藤　宏（編）・中村大介
編集機関	神戸市教育委員会
発行機関	神戸市教育委員会
所 在 地	〒650-8570　神戸市中央区加納町６丁目５番１号　TEL 078-322-6480
発行年月日	西暦 2009 年 2 月 28 日

所収遺跡名	所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
本山中野遺跡（もとやまなかのいせき） 第３次調査	兵庫県神戸市東灘区（ひょうごけんこうべしひがしなだく） 本山南町７丁目 3-1（もとやまみなみまち）	28101	01-033	34° 43′ 32″	135° 17′ 07″	20071217 ～ 20080204	130㎡ ×３面	集合住宅建設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
本山中野遺跡 第３次調査	居宅・集落	古墳時代後期 飛鳥時代 奈良時代 平安時代	掘立柱建物 水田 水溜め	緑釉陶器・灰釉陶器 須恵器・土師器 白磁・瓦 木製品（曲物・泥除け）	平安時代前期の居宅 奈良時代の瓦

要　　約	３面の遺構面を確認。第１遺構面は奈良時代末から平安時代の居宅。十世紀前半に焼失する大型の掘立柱建物があり、緑釉陶器・灰釉陶器などの高級食器が多く出土。墨書土器の文字からもこの屋敷の主がこの地域を統率するクラスの人物であったと推測できる。第２遺構面は飛鳥時代から奈良時代の水田。水田を覆う洪水砂からは奈良時代の瓦が出土。調査地の北に瓦葺き建物の存在することが推定される。第３遺構面は古墳時代後期から飛鳥時代の水田？後背湿地がようやく陸地化し、木道敷設や土留めを行い、開発の始まることを確認。

本　山　中　野　遺　跡
第三次発掘調査報告

2009. 02. 28.

発　行　　神戸市教育委員会文化財課
〒650-8570　神戸市中央区加納町６丁目５番１号
TEL 078-322-6480

印　刷　　デジタルグラフィック株式会社
神戸市中央区弁天町１－１
TEL 078-371-7000

神戸市広報印刷物登録・平成20年度　第321号（広報印刷物規格 A－６類）